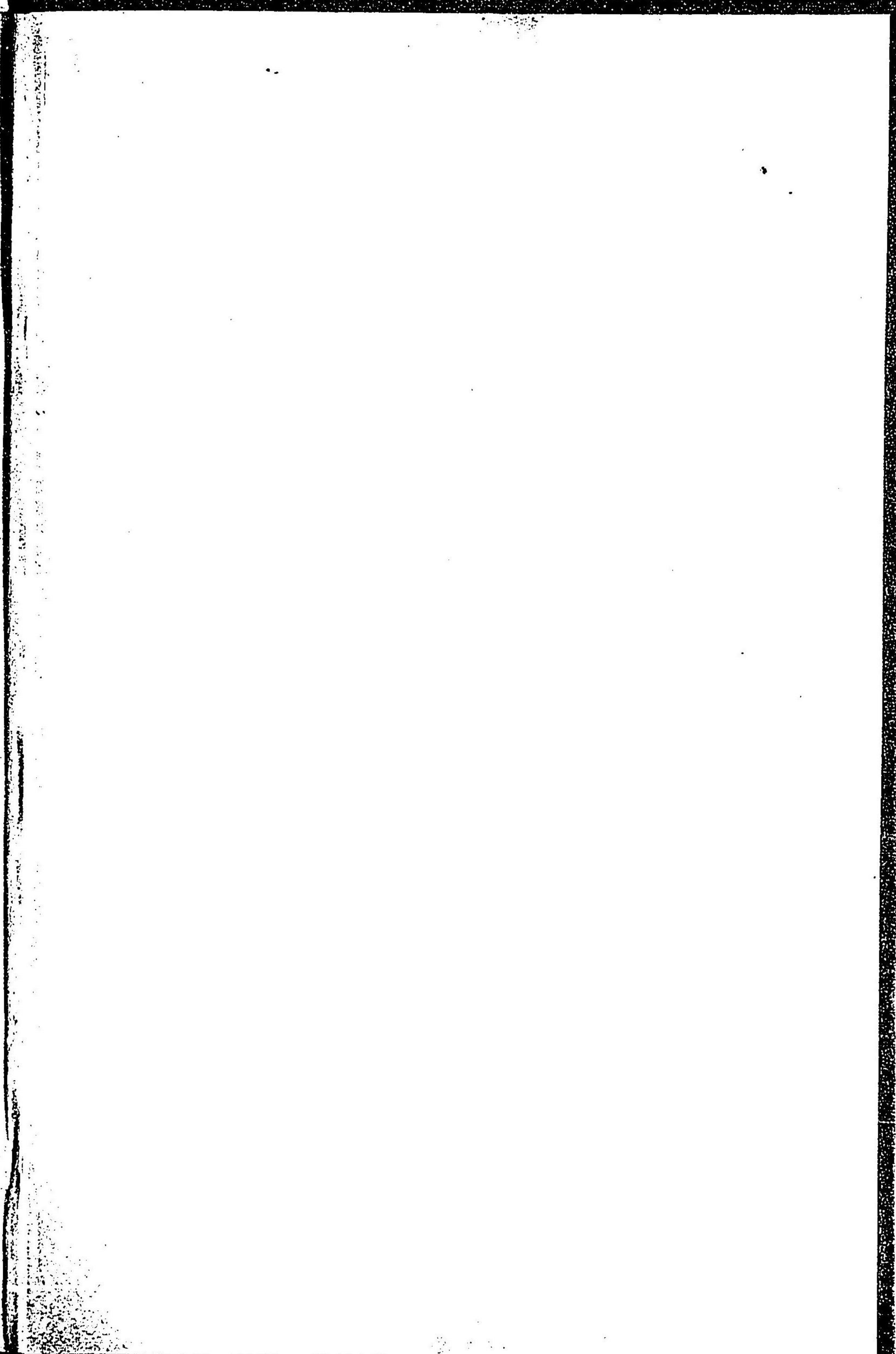
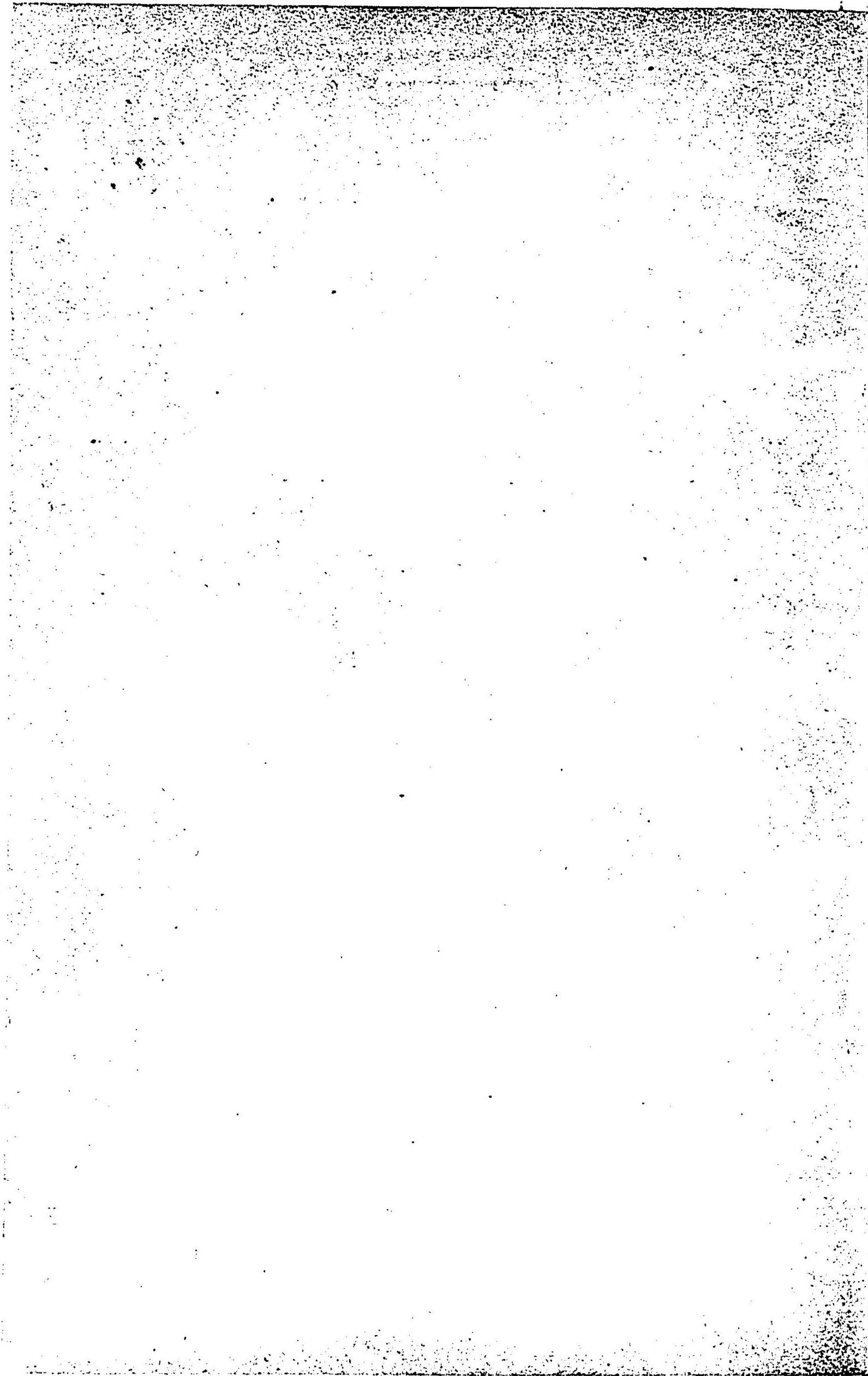


白柳湖

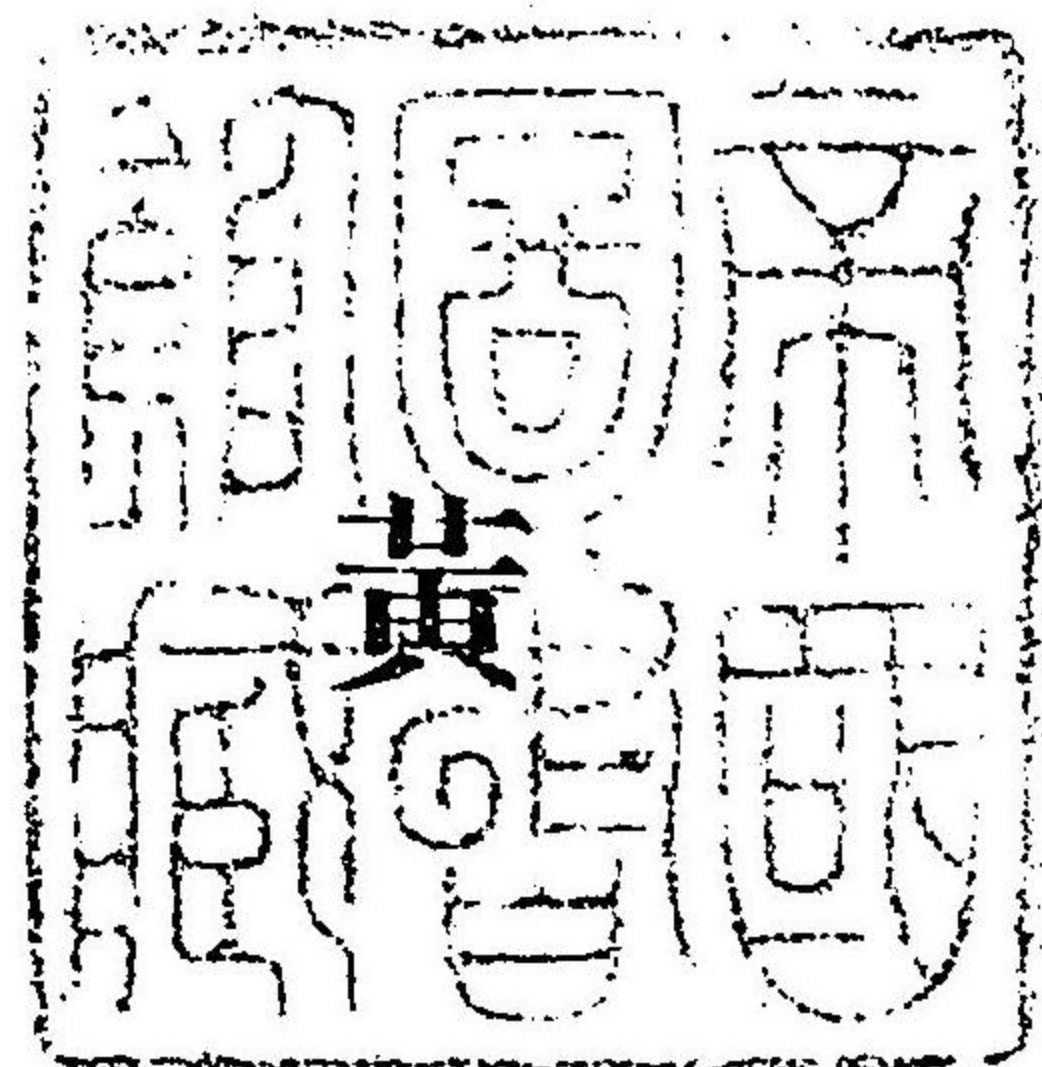
白柳湖







5511  
256



昏

白  
柳  
秀  
湖  
著





## 序

史家は少くとも其事實があつてから五十年を経た後でなければ、之を記録して完全な歴史とすることは出来ないと言ふ。小説家は史家のするやうに、戦争とか、政變とかいふ騒々しい波瀾を中心として、其社會を解釋しないけれど、名もなき一書生、一労働者の生活を忠實に描寫することによつて、たゞ平旦な事實の間から、生きた社會の大歴史を作り得ることがある。

六十の老翁、二十の春を知らずと云ふのではないけれども、をりをり文部大臣の訓令とか、老記者の論文とかいふものを讀むで見ると、



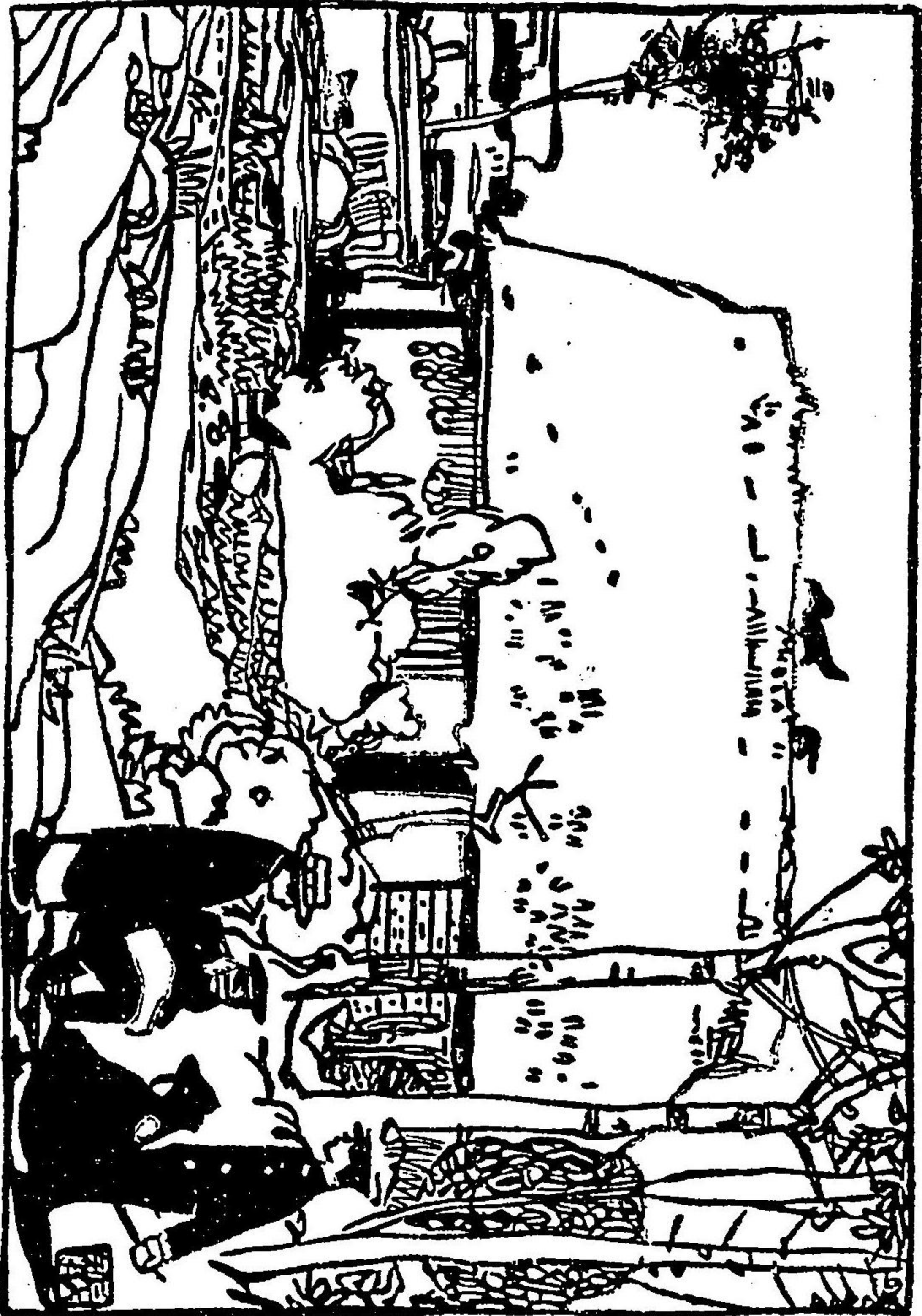
其時代の青年の生命は、其時代の青年でなくては好く分らぬと云ひ度  
いやうなこともある。

此小説は只明治三十八年代に於ける一部青年の生活を忠實に書いて  
見たといふばかりで、他に何の意味もない、されば之が或る記者によ  
つては學生の墮落を攻撃する好個の武器となる事かも知れない。

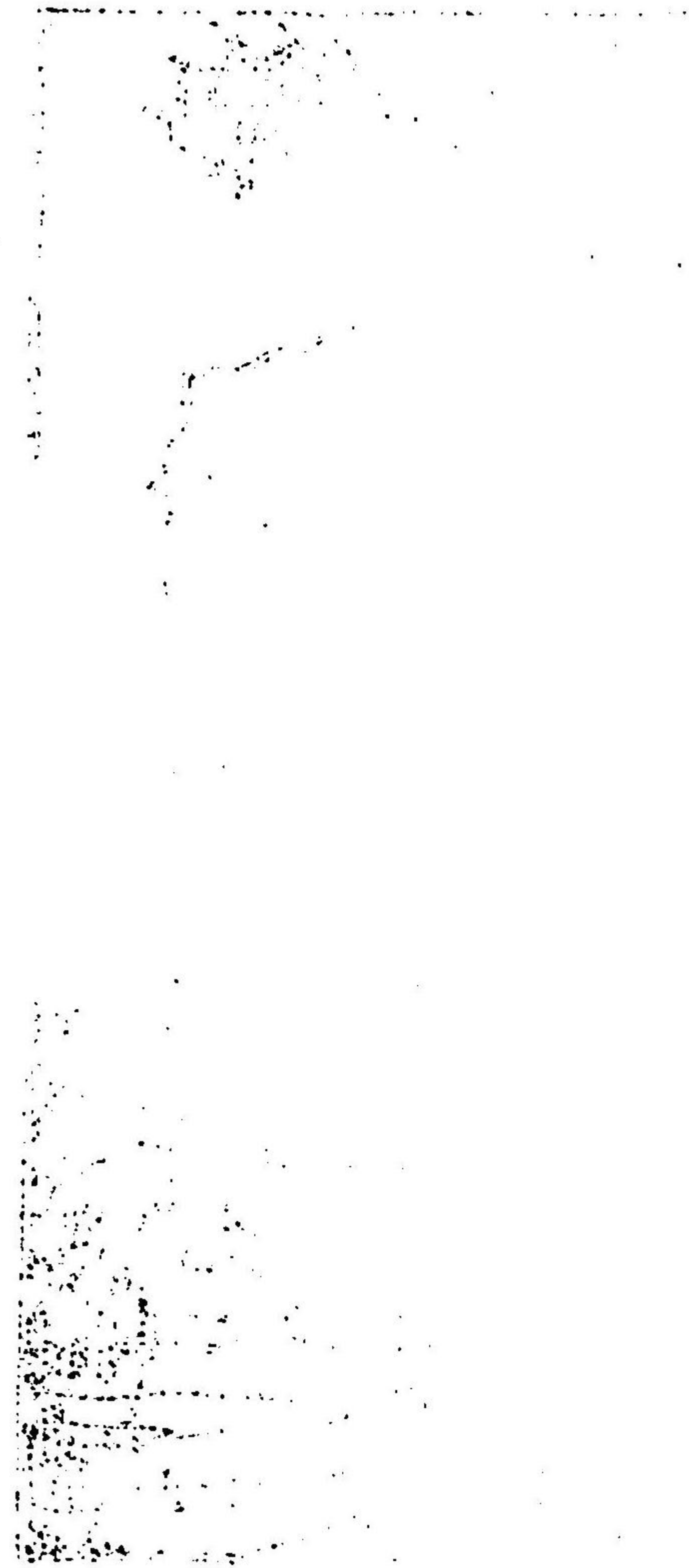
千九百〇九年三月三日

秀湖生











# 黄 昏

白 柳 秀 湖

昏 黄

それは明治三十八年の夏の事である。  
卒業試験の成績が發表されてから二週間目の午後、早稻田大學の秀才  
辻村雅夫は牛込北町に住む、親友の栗野英二から意外とも意外なる通知  
に接した。

(1) 栗野は、其時鎌倉坂の下に滞在して避暑中であつた。栗野の端書が小  
石川原町の辻村雅夫の下宿に届いた時に、彼は二階の六畳の障子を明け  
放して、なまぬるい盛夏の風を入れながら、九月から栗野と共同で發刊



すべき雑誌『曉鐘』の巻頭の宣言を一生懸命に書いて居た。

『曉鐘』といふのは辻村と栗野とが當代の文壇に對する不滿を總へる機關として此九月から創めやうといふ文藝雜誌で、戲作主義の文學に反抗して、個人の生命其ものとしての、藝術を觀やうといふやうな意氣込で、辻村がいま特意の刺戟的な筆で巧みに書き上げた二三項の宣言の中には、『藝術の根底に横はれる人生、人道の光に觸れんとす』といふたやうなキビ／＼とした目新しい語句が多かつた。

其頃文藝上の組織だつた理窟は未だ此若やかな人達の頭腦になかつたけれども、技巧を排斥して、人生の眞實を追求しやうとする熱情は此人達の文章の到る處に溢れて居た。此情熱がやがて此人達をして從來の文學といふものに對する不滿の念を彌／＼強からしめたので、此群の青年の胸の底には、火のやうな霸氣のほかに、深い／＼新運動の抑へ難き衝動

があつたのである。

尤も辻村雅夫はもと文藝よりも社會學的の興味を有つた男で、同窓の友が多く沙翁の研究などに努めて居た間に、社會學的の毒物を耽讀したし、ステパニアツク、クイロポトキンなどは彼の最も愛した著者であつて、圖書館にある「相互扶助論」の如き、其頁にナイフを入れたのは、まさに此青年であつた。

されば、辻村雅夫は早くから靜かに此國に發達して行く民主主義の傾向などにも深い／＼、興味を持つて、露國初期の虛無黨を見るやうな一派の社會主義者——社會の恐ろしい惡聲の裡に葬られて行く——の群とも深い交際があつた。

時はちやうど日露戰爭の後で、政府の恐ろしい迫害と、社會のはげしい惡聲とが一時此人達の小さい機關雜誌を粉碎して其運動の上に壓制の



大磐石を横へた時であつたので、辻村と粟山の「曉鐘」は少からず世間と政府との注意を惹いて居た。

粟野英二は極めて冷徹に之等の運動を看過して居た。彼は辻村のやうに多血質でない代りに極めて神経質である。性來から云へば、極めて内氣の、無口な、始終自ら内に省る所の強くはげしい男で、文學者といふよりも寧ろ哲學者といふ肌の青年であつた。

けれども粟野は其若き日の戀を失つた事によつて、生活といふ事に強い興味を持つて來た。彼の初戀は、なべての青年が必ず一度は経験するやうな、只ひたすらに胸をとどろかす切なる思であつたけれども、其かぎりなく優しと見た唐人鬘にまた肩上の戀人が、さる小官吏に所望されて、嫁ぎ去つたらしる姿を、恨長く見送つた彼は、茲に生活といふ事に強いく興味をもつやうになつて來た。

彼が十九の春であつた、収入もない職業もないものは、所詮人を戀するものでないといふやうな、苦い世間の味が強く其内氣な青年のやはらかい頭腦を刺撃した。其頃粟野は獨逸協會に居て眞面目な勉強家であつたけれども、此頃からして急に學校といふものが馬鹿らしくなつて來た。

早く實際生活に入つて、心ゆくまでに現實と奮闘して見たい、何事も忘れて生活の途に突進して見たいといふ反抗の血が粟野の胸に湧いて、其黒い瞳には、常に男性の鋭い光が浮んで居た。際立つて廣い額に、緑の髪が波うつて強い意志の力が溢れるやうな其厚い唇など、すべて印象の深い顔であつた。

廿一歳、廿二歳と年を重ねるにつれて、粟野はもう昔の内氣な、少年ではなかつた。未來も過去もない、闘つて闘つて、闘ひ盡して行ける處



までは、行かうと云ふ彼は極めて好く語り、好く談ずる青年であつた。辻村と栗野とが早稲田の學堂に同窓であつたのは極めて短い間であつた。栗野は早稲田の文科へ入學すると間もなく學校は嫌だといふて廢めて仕舞つた。其頃栗野の兄弟が氣鋭の青年を集めてトルストイ研究會といふものを組織して、毎月交る／＼トルストイの著作の梗概と批評とをする事にして互に氣焰を吐き合つて居た。

辻村はちやうどトルストイの『現代の奴隸制度』といふ論文を紹介する番であつた。其夜辻村は得意の花やかな辯舌を揮つて、其梗概を説いた上に、此書に於ける杜翁の結論は無政府主義であるといふ事から、クロポトキンの科學的無政府主義と、トルストイの精神的無政府主義とを比較して、一座の青年を殆ど酔ふが如くに傾聴せしめた。

栗野の家は板塀に白樫のこんもりと往來に差出た可なりに立派な構へ

である。亡くなつた父親が築いたといふ坪庭には、茶の好みを見せた、庭樹や、燈籠に苔の香がしめやかで、此都市の平和な中等社會を代表する家庭であつた。

栗野の部屋は白樫の下の大疊で、『此樫の木は僕の財産だ。塵埃つばい市中に憚うして居ても、此樫の葉越しに夕照の雲がかゝるのを見ると、直ぐ曠い野原の景色が眼に映るやうだよ、僕は少年時代のあの懊惱を幾度か此一本の樫の木によつて慰められた』と栗野が會つて辻村に話した、其印象の深い樫の木の所で、栗野、辻村、安城、山内を始として此群の青年が幾度か時代を論じ文藝を議した。『曉鐘』の創刊も此處で計畫されたので、資本は栗野が富士見町あたりの講義録の出版者か何かを甘く説き付けたのであつた。

栗野の兄といふのは麴町に在る私立女學校を經營し、傍ら二三の學校



に教鞭を執つて居る倫理學者で、弟の周圍に集る青年の群には少からぬ興味を持つて居た。トルストイ研究会なども自分が發起して大分熱心に研究もし、批評もするといふ状態であつたが、弟が學校を輕んずるのにはチト閉口して居たらしい。

栗野が早稻田を廢めた事に就ては兄よりも寧ろ母親が非常に心配した栗野は幾度か學校生活の無意味なる事を説いて見たけれども、彼が職業もなしに遊んで居る間は、何といふても辯解は無駄であつた。

栗野は何か事業を見付けて機會があつたら下宿でもしやう、そうすれば、自分の事に就ても親や兄弟から爾んなに世話を焼いて貰はなくとも好いと思つて居る矢先へ「曉鐘會」が成立つたので、栗野は立處に其經營を引受けたのであつた。栗野の兄の處へは、好く文壇に知名の人達が訪ねて来る。栗野英二は以前からもう之等の人達と知り合ふて居たので、

出版屋との交渉も案外早く纏つて、いよいよ九月から「曉鐘」を發刊する事にさめて、其打合せは幾度か辻村等と例の白樫の下の座敷で開かれた栗野が避暑かたぐい鎌倉へ立つたのは、辻村の卒業試験が終つた日であり二週間以前の事であつた。

下婢が持つて來た栗野の端書を受取る刹那まで、辻村はまた栗野が海岸の月のたよりにいつもの心的生活を認めたスケッチでもあるだらうと思ひながら、何の氣なしに裏を返して見たが、彼は急に愕然として顔色を變へた。

「安城の手紙によると辻村龍川は落第したといふ事だが何うしたのかと思つて心配して居る。」

君の昨日の手紙にもそんな事は露ほども漏してなかつたのはどうかまさか當人が知らないで居る譯でもあるまい何かの間違ではないか



僕はそれがキツト間違である事と信ずる」

辻村龍川と熊々雅號を用いた上に、第三人稱を用いて書いた栗野の端書は辻村の胸を恐ろしく刺つた。辻村は石のやうになつて端書を三度読み返した。手先がブル／＼と顫へるとこんどは深い嘆息をキツと漏した。『西哲……倫理……譯讀……支那哲……心理……英作文……』といふやうに辻村は口の中で幾度となく試験の科目をとぎれ／＼に、つぶやいて見た。脂汗が彼の額に浮んで来た。

『そつた英作文に違ひない、出席簿で探點をするのは、彼の教師より他に無い』と彼は稍暫く黙想に耽つた後で低く私語いた。

辻村は急に思ひ出したやうに帽子を手に取つて二階を下りやうとしたが、また引返して机の中から財布を持ち出して、露路を小急ぎに原町の街路に出た。

はげしい夏の日はもう土井の邸宅の松林に落ちて、荷車の往來の目まぐるしい鶏聲が窪の街路には、灰のやうな煙塵に打水の涼しい夕暮であつた。

辻村は、下宿の露路から軒先を拾ふやうにして哲學館の表門際にある雑誌屋の店頭に立つた。

『早稻田學報がありますか』辻村は沈んだ調子で尋ねた。何時でも店頭に居る三十四五の婦人が、『早稻田學報』と口ごもつてさも氣の毒そうに云ふたが、『どうも、お相憎さまでした』と思ひ切つたといふたやうな調子で愛嬌よく云つた。

辻村は黙つて店頭を辭した。



(11)

蒸し暑い、如何にも寝苦しい夜であつた。辻村は落第のことが氣になつてどうしても眠れなかつた。

夕方、鶏聲が窪の雑誌屋で十五日發行の『早稻田學報』を買つて、成績をたしかめやうと思つたけれども、小石川と云ふても本郷の勢力範圍にある此邊の雑誌屋には、半ば非賣品のやうな『早稻田學報』は無いのであつた。辻村は其足で、直ぐ牛込まで行つて友人の安城を訪ねて事實を確かめて見やうかとも思つたけれど、原町も此處からでは早稻田まで一里以上の道程であるので、明朝涼しいうちに安城を訪ねる事に決めて下宿へ歸つて來た。

朝が白山の森に鳴きしきる頃、辻村は不甘い下宿の夕飯を済まして、

靜かに考へて見る爲に生糞の暗町へ歩を運じた。辻村は落第といふ彼にとつては初めての、耻しい経験をしみくと身に味ふた。

夕暗の路に白地の浴衣が何となくはづかしい。學校生活を輕んじながら種々な事情に縛られて、矛盾した二重の生活をして來た過去の愚かさや青年の驕慢な態度とが、今更のやうに想ひ做される。爾うして今書いた『曉鐘』の宣言のことなどを思ひ出して見ると、此夕暗の中に溶けて消え去りたいやうな氣がする。

辻村は學校生活の無意味を感じながら落第の無意味を感じる事が出来なかつたのである。

ともすると患者の様に熱度の高まつた彼の耳に、何處からか鼻の聲が夢のやうに聞えて來る、ツァイオリンの音が涼しい夕風の間に斷續する。生糞の間を幾度となく曲つて辻村は、鬱然と黒く茂つた樗の木立の間



から異鳴の空の黄昏の光を見る砂の白い往來へ出た、彼は一向に考へながら此道を北へ、駒込の富士前に出て、それから田端村の方へ下りて行くのであつた。

道すがらも彼は考へた。かぎりなき慚恨と、羞耻の情はいつしか其胸に盡き果て、新しい反抗の血が邪路に走りかけた。

「もう學校は断然止めだ、大家や、學派の力によらなければ世に生きて行く事の出来なかつた時代は既に過ぎ去つた、乃公はキット只孤獨で自分の運命を開いて見せる。

粟野は實に傑い處がある。あの家族の反對に打ち勝つて、断然學校を止めて勉強して居る、勿論乃公には故郷の親父と東京の伯父との關係などもあつて、粟野のやうに容易くは出来難い處もあるけれども、貴重な青春の日を只戸山が原の櫟林の下で寝て暮した從來の二重の生活を想ふと

冷汗が流れる。

それにしても癪に障るのは英作文の教師だ、一學期中一日も出席しなかつたのは自分も悪いには違ひないけれども、あの教師の卑屈な態度が嫌だつたからでもある。出席簿で生徒をよどしては無理にも職權を濫用する、自分の書いた教科書から試験問題を出すといふてはそれを賣り付けやうとする。

あれよりも有馬の『日本魂』の方がまだ無邪氣で好かつた、あれ嫌だ、もう學校の御世話なんかにはどうしても成り度くない。追恨やら、猜疑やら、さまざまの不快の念が、我知らず辻村の胸に湧いた。限りなき空想を追ふて彼は何時の間にか、道灌山の上に立つて居たのである。

星のさやかな夜である。岡の端に露のしめやかな草を藉いて彼は茫然と、脚下から下總の高原にわたる武蔵野の霧の景色に眺め入つた。



田舎者にしては思想も進んでは居るけれども、寧ろ無邪氣なほどに虚榮心の強い父親に辻村は何として落第のことを知らせて遣らうかと思ふと、云ひ知れず辛かつた。「親父の虚榮心といふのは、詰りは親父が自分の學才を信じて居るからだ」と辻村はまた思ひ返して遺頼なき嘆息を漏した。

辻村のちもひは何時しか林町の伯父、それから忘れぬ小夜子の上に遷つた。此はげしい煩悶の間にも漆臘と辻村の意識の隅に隠れて居た、花やかな乙女のあくまでも、男性の才華を慕ふ、美しい瞳の色が瞭然と辻村の觀念に浮んで來た。

噫、小夜子―何として再び小夜子と共に自然と人生とを語らうかと思ふと、辻村は慚愧に肉身も煨さ盡されるやうで、もう凝然と考へて居る事は出来なかつた。

辻村は頑固な伯父と、美しい小夜子の映象を揉み消さうとして立ち上つた、露を踏んで歸途を夢中に歩くつもりであつたけれども、小夜子の美しい面影と、過去の夢のやうな追想とは遂に辻村の念頭を離れなかつた。

辻村は何時しか落第の恐ろしい苦悶からのがれて、楽しい戀の追想をたどつて居た。爾うして、時々「落第者」と云ふ恐ろしいおもひがその美しい追想を破つて、電光のやうに閃めいた。

其度毎に彼の歩は立ちすくんだ。彼が原町の下宿に歸つたのはもう夜の十二時近い頃であつた。

彼は強て睡眠に陥らうとして努めた。



早稲田大學の大講堂には、今文科の學生がミッシリと詰めかけて寺島老博士の講座に上るのを待ち受けて居る。明治文壇第一の大家と仰がれる老博士の生命とも云はれる沙翁の講義は文學部三百餘人の學生を一人も欠席させないのみか、法科や政治科の彌治馬連までが潜り込みで居るのでさしに廣い大講堂も殆ど立錫の地なる状態である。只見る塵埃臭い講堂には地方で屈指の資産家の倅らしい青年がガヤガヤと彼方でも此方でも思ひ／＼の話題に笑ひ興じて居る。單衣の重ね着、而かも大切そうに白地の方を下に、襟を見せて掻き合せた男の、頭の髪ばかりテカ／＼と光つて居るのが目に立つ。爾うかと思へば、面砲の跡

が黒ずんで何處となく煤ばんだ顔に、口髯をチツクで撫で付けたのも見える。

彼方の隅では政治科の生徒と文科の生徒とが、頻りに鏡花論を戦はして居る。此方の机では銀座の有名な藥種屋の倅とか聞いた色の白い人が江戸文學の話から、露伴先生の近作などを評判して居る。中等教員の志望者は集まつて、地方の中學校に備はれて行つた校友の噂をして居る。本郷座の劇評家と、演藝研究會の花形役者とは劇壇の將來に就て重大な問題を提供して居る。煙草の煙が廣い講堂をこめて、云ひ知れぬ悪臭が鼻を撲つ。此群の後方に辻村雅夫は差しそりに小さくなつて机に倚つて去年戸山が原で雨に濡らした、汚黒のあるカッセル版の「ハムレット」を擦げたまゝ、忙然と眼を落して居る。



書籍には去年コピー、ペンシルで書き込んだノートが瞭然と讀まれて居る。

辻村は今再び同じ博士の、同じ「ハムレット」の講義を聴くのだ。會ては自分が圖書館から出て来る姿を見て、「あれが有名な龍川君だ」と下級の人達のささやくのを聞いて、開かぬ顔の胸の底に、人知れぬ得意の波をよどらせた其下級の人達と一處に、辻村は今再び博士の「ハムレット」を聴くのである。

やがて講義が始まつた。

講義は流石に老博士の生命であつた。何度聴いても、初めて聴く時と同じやうな感興にうたれる。博士が一度口を切ると共に辻村の不快の念は霧のやうに消え去つて、恍惚と其絶妙な講義に惹き入られた。

今、辻村の眼の前には、大劇詩家によつて、彩られた、自分達と同世

紀、同時代の青年が活躍して來た。

哀愁にやつれた姿、眼想に耽つて居る容、紫紺天鵝絨の衣服、小意氣な帽子、絶妙な會話と優美な動作とを演じて常に「自我」の爲に煩悶して居るハムレットは、擒縱自在なる老博士の解剖によつて、天晴現代の青年として現はれて來た。

辻村の眼には此十八世紀の失戀家スタイルをしたハムレットが、其周圍に集まつた鏡花の崇拜家よりも、本郷座の劇評家よりも遙かに新しい近代式の型に見做されて、魅せられたものやうに恍惚と聽き惚れた。

哄然と滿場の聴衆が吹き出したので、辻村も無意識に笑つたが、それは博士が例の得意の洒落を云ふたのであつた。

博士は去年も同じ洒落を云つた。

辻村の恍惚は醒め果てた。「噫自分は落第をしたのだ」といふ、不快の



念がムラ／＼と胸に溢れて脂汗が彼の肌一面に潤み出した。

驚いて眼を醒すと辻村は盗汗をビッシヨリかいて居た。昨日からの思ひ疲れに僅か二十分ばかりトロ／＼とした、其うたゝ寝の夢が今の「ハムレット」の講座であつた。

辻村は思ひ切つて蒲團から這ひ出した。手探りで机の下から燐寸をとり出して、丁字の溜つた五分心の洋燈に火を點けた。

石油の異様な臭が部屋に満ちて、頭がフラ／＼とするやうであつた。

(四)

ちやうど一昨年の春の暮、辻村が二度目に栗野の家を訪ねた時の事であつた。栗野と辻村とが例の六畳で盛んに民主々義の議論を戦はして居る處へ、栗野の兄の誠一が薄い口髭の下に微笑をたゝえて入つて來た。

辻村は此處で初めて栗野誠一に紹介された、誠一は有名な倫理學者であるし、將來どんな世話になることかも知れないと思ふたので町噂に初対面の挨拶を済した。

春の淡い夕日が苔の蒸した向側の家の屋根から迂り落ちて、黒板塀を斜に、白樫の影をシットリと玄關先の庭に映した。

話題はまた思想界の事に轉じた。



「僕は辻村君の此頃の思想の傾向を非常に喜ぶよ、確かに長足の進歩だ、社会主義運動に對する、此國の學者の批難の武器は、今でもダーツニズムと國家論だ。」

けれども僕が從來社会主義を冷眼視して居たのは、全く異つた方面からであつた。

僕に云はせると國家は或る意味に於て社会主義だ。見給へ此國の單位は家族だ。個人は家族の犠牲であると共にまた國家の犠牲だ。大日本帝國といふものは社会主義の理想が或る程度まで實現されたものなんだ。

それから進化論を引張つて來て社会主義を攻撃するなんぞといふ事は五十年も昔に獨逸の學者のやつた事で、社会学が研究されるやうになつてからの人間のする事ぢやあ無い、社会主義の弱點は組織制度といふやうな唯物的研究のみ囚へられて、人間の個性を無視する點にある。

僕は絶對的の個人主義者だ……」と栗野英二が、蒼白い顔に、ほのかな紅を浮べて云ふ、辻村が後を受けて……

「僕は政黨運動などを五十年も、六十年も續けて居る此國の名士と謂はれる人達などが何故もう少し早く人生の真相を觀破し得ないだらうかといふ事を不思議に思ふね。」

凡そ多數の人間が或る主義の下に一致して運動するなどといふ事の裡には、人間の本性が遺憾なく曝け出されるものだ、例へば、僕達のやうなもの同志を集めて或る小さい文藝上の團體を作つて見たとしてもだ、其幹事として、其會員として、人間社會の上にコンクチビズムといふやうな理想の行はれるものでないといふ事は互がシミ／＼經驗する事ぢやないか。

議會とか、政黨とかいふやうな事で騒ぎ廻るのは人間といふもの、



本體を知らない者のする事だ。』

「其議會や政黨が腐敗したとか、墮落したとか云ふて、労働者を集めて階級戦争をしようなどと云ふ社会主義者は、宛然水で水を防ぎ、火で火を消さうとするものぢやあないか。」と栗野は稍ともすると社会主義に突き込んで来る。

誠一は煙草を煙しながら、静かに二人の話を傾聴して居る。

「そうだ、馬鹿／＼しいには違ひない、けれども従来歐洲の社会には革命といふものがあつた。其革命は一時的ではあるけれども多数の民心が、集合的に、機械的に働いた一種の社会現象だ。

例へばね、君はあの綱引といふ遊戯をした事があるだらう、多数の人間が二手に分れて、綱を引合ふ。力が勝つて、敵手の方をズル／＼と引きずる方の動靜を見ると、ヨイシヨ／＼といふ懸聲が揃つて、呼吸が一齊

になつて居る、だから、ウンと力を入れては、チヨイと力を緩める、其七分三分の調子が揃つて、多数の味方が宛然一人のやうに働いて居る。恁ふ云ふ具合に力の調子が揃つて来ると十人や二十人敵に加勢をしたからといふて何でもなし。

けれども此綱引遊戯の刹那のやうに民衆の精神が機械的に、集合的に働くといふのは決して健全な社会の常態ではない、必ず一時的の現象でなければならぬ。革命がそれだ。民心が機械的に働く時には音頭取は鐵道の踏切番で澤山だ。

必ずしも英雄の力を待つ必要はない。労働者に階級的の自覚を起させやうと云ふのも、詰りは此革命を欲するからだ。無論労働者の同盟とか普通選挙の運動とか云ふ事が彼等の終局の目的ではあるまい。僕にはどうも多少の政治的興味があるね。』



辻村の會話はまた一座を征服した。英二は床の柱に身を倚せて花やかな辻村の辯に聴き惚れては居るけれども、其獨斷の箇所は一々ハッキリと分つて居る。

「革命の心理的解釋ですね、音頭取は鐵道の踏切番で澤山だといふのは面白い」と誠一は初めての故か英二よりも感心したらしい。

「マアそれは兎に角として人間社會といふものが、何んなに民主的に進歩してからか。未だ秩序とか組織とかいふものを中心として成り立つて居る間は、壓制の新しい形式がドシ／＼産れて来る。

人間を統一する必要のある間は、人間を壓制する必要がある、多數の人間を統一して或る勢力としやうと云ふには、どうしても一方で壓制して、一方で教化しなければならぬ。

其處へ行くとマホメットは小氣味の好い男だ、彼奴は儲かに世態人情

の真相に通じて居たんだね」と英二が靜かに語る。

「其點は僕も同感だ。あのニイチエもトルストイも同じやうに人間を觀たのだ。けれどもニイチエは強者となつて衆愚を征服せよといふ態度に出た。トルストイは何かして人が人を征服する世界から遁れやうと云ふ態度に出た。僕などはクイロボトキンが好いと思ふね科學が普及すれば各個人が舊社會の制度と教化とを離れて別に眞實の世界を觀るやうになる、社會に對して自己の個性を意識して来る。

個人意識の絶對境に無政府の社會が成立すると云ふ、あの説が一番面白いと思ふね。」

「老莊の見方が大體それですね。誠一は倫理界では有名な學者であるけれども、今はさながら二人の青年の氣焔の捕虜となつて仕舞つたやうな状態である。」



誠一はもと倫理學上のヘーゲリアンで、彼の學說の出發點は何時でも社會に於ける習慣の破壊、建設といふやうな問題にある。彼の學說は頑固な團體主義ばかりが、蔓つて居る此國の學者の說の中で何時でも多少の異彩を放つて、常に一部の青年から少なからぬ興味をもつて見られて居た。

けれども言論思想の不自由な此國に社會的地位を占めて世間から兎角批評の絶えない女學校までも經營して居る此人の周圍はまだ古い時代の霧で閉ざこめられて居た。多少でも急進的の興味をもつて居る此人にとつては、其微温い日常生活がまた云ひ知れぬ苦痛であつた。誠一は、今二人の青年の何ものにも制肘される所のない、大膽な、奔放な、寧ろ無責任な議論が、何とも知れず嬉しかつた。他人から見たら傍にも無げな、頭痛のするやうな堅くるしいこの談話が、宛然月のあかい夜に聞

く音楽のやうにも聴き做されるのであつた。

其處へ十七八歳の丸顔の、身幹の低い女中が茶を入れかへて、菓子と運んで来たが、誠一の方に小聲で、「あの西村様がお見えになりましたが……十疊の方へお通し申しませうか」

「ウム」と誠一が諾いたので女中は立つて行かうとしたが、「オイ、構はん此方へお通し申せ……」

それから燈火を持つて来て下さり「と誠一は優しくたくみかけて云ふ女中は敷居際まで下つて行く處を「ハイ」と畏れ入つてかしまつた。花は散つたが、青葉の色は未だ淺い、黄昏の光はまだ庭面に残つて、矢獨蜜の花の緋に映えて居る。

稍冷めた春の夕の空氣に、燈火があかく照された。英二は起つて窓の障子を閉めた。



もう虫の聲の聞えさうな晩だ。

「老莊は深く人間を觀たのです、孔孟の説はそれに比べると政治學校の書生のやうな口吻があるではありませんか」と辻村は誠一を前に置いて何處までも老人じみた事をいふ。

燈火が照されると共に一座はまた新しい感興に生きて來たやうである。

廊下に衣摺の音がして袂が開くと、二十歳ばかりの處女の顔が花やかに現はれた。細面の腮のこけた、眉の濃い、少し眊の釣り上つた顔に、瀟洒と化粧をして、格好な束髪に爵金色の薔薇を釵し居る。敷居際に膝づいてしとやかに誠一に一禮した。

顔をあげると洋燈の光が、一際鮮やかに姿容の好い處女の姿を照取よく照した。理窟張つた一座には、急に美しい春の光がみち／＼と來たやうに、思はれた。

辻村は此處で初めて西村路子に紹介された。



路子の家は栗野の遠縁の親類で、死んだ父親が牛込の東五軒町に家を持つてから今も其處に暮して居る。路子の父といふのは、海軍の古い主計官で、大分勤功のあつた人と見えて、死ぬと少からぬ恩給金が下る事になつた。路子の母は其恩給金と遺産とで、路子の他に三人の男の兒を養つて、何の波瀾もなく十年の後家を通して來た。

路子の上の兄は去年の夏大學の工科を卒業して、今は鐵道廳の技師で相應の收入もある。親類や知人は嫁を貰へといふて頻りに勤めるけれども、どういふものか、爾んな話には耳も傾けない。其次が二十三歳でいゝ高等學校の二年生である。それから一番の末が十四歳で麴町の富士見小學校に通つて居る。

(五)

長兄は少年の時から繪畫に興味を持つて水彩畫などは可なりの上手で、今に暇さへあれば繪葉書にスケッチなどをして楽しんで居る。工學士といふても部屋にはあまり讀んだことのない沙翁や、ウォルズウォルスなどの洋書が綺麗に飾り付けられて、塑像もあれば、油繪の額面もかゝつて居る。高等學校に通つて居るのは素人寫真が道樂で、富士見小學校の弟はベースボールが得意である。

長兄が鐵道廳へ勤めるやうになつてからも西村家のお客は矢張長兄が大學に居た時分の同窓か、それでなければ時々親類の伯母が訪ねて來る位のものであつた。長兄の友達は、東京の中等階級に育つた新しい青年の群で、話は何時でも白馬會や太平洋畫會の評判、それから世間の噂に上つて居る大作の批評、文壇の消息などで持ち切つた。母のお客は多く親類の伯母連で、話は何時でも夫が生きて居た頃の追



懐談や、成長して行く兒童の行末、長男の嫁、路子の縁談、次男が此間撮つて呉れた寫眞の面白く不出来であつた事、三男の悪戯が過ぎて困ることなどであつた。

母はよく慙ういふた。「どうです家でも男の兒が三人、それに路子までが合同になつて、やれ昔の人は分らないの、お母様は駄目だのと喰つてかゝるんですもの、大底遣り切れないぢやありませんか。けれども其かはり御蔭様でめづらしく兄弟仲は好いのですよ、慙うして四人が口論一つしないで暮して行つて呉れますからね。」「母親が自慢するやうに西村の家庭は、まことに他家の見る眼も羨ましいやうに新しい人と古い人とが好く折合つて居た。

路子は慙ふ云ふ空氣の中に人となつたが、成績も優等で十九歳の春、御茶の水の高等女學校を卒業すると其儘女子大學の英文科に入學した。

尤も母親は路子を女子大學に入れる事には大分反對であつた。けれども二人の男の同胞が皆路子の切なる希望に同情したので、路子はとうとう女子大學に通ふ事となつた。

路子はもうお茶の水に通ふて居る時分から栗野の家族と同伴で鎌倉あたりに夏の休暇を送つた事などもあつたが、大學に通ふやうになつてからは屢々誠一を訪ねて、さまざまな思想の話などを聞くことに云ひ知れぬ興味を持つやうになつて來た。

英二の戀した少女といふのは、路子の學校友達であつたのである。

辻村は英二と戸山が原から落合の野を散歩した時などに、路子の噂は度々聞かされたけれども、會ふのは此日が初めてであつた。

其夜路子は三人と誠一の妻君が用意して呉れた半洋食の食卓を圍んで、會て聞いた事のない、生々とした何となく胸を刺されるやうな、青



年の情熱に満ちた談話に聴き入った。

路子が加はつてから辻村と誠一との間には盛に婦人問題に關する談話が交へられた。路子にとつては此人達の談話は皆新しい印象であつた。

英二は相變らず局外に立つて時々皮肉に二人の急處に突き込むで居た。

「路子様の學校なんぞが爾うです。成島君が熱心な基督教徒である處から云へば、あの學校の女子教育はどうしても個人主義でなければならぬ。」

處が成島君は矢張り良妻賢母主義をとつて居らるゝやうだ。女を良妻賢母に仕上げるといふ事は、極端に云へば一個人を家族の犠牲とする事を意味するので、日本ではまだ女を個人として見る事が許されて居ないので。現に文部の當局が女に多くを知らしめるの必要が無いと云ふ事を演説したのはツイ此頃の事ではやう。

だから貴女の學校の教育には、凡ての點に於て矛盾が多いのです。」と誠一が云ふ。

「あの演説の筆記は僕も新聞で讀んだ、西洋人が此國へ來て日本婦人の温良貞淑な風を見て非常に羨ましがると云ふ事が書いてあつたけれども、あれは随分勝手な話だ。西洋の婦人がまだ日本の男子を羨ましがつたと云ふ事がないから可笑しいぢやあないか。」と今度は英二が云ふ。路子は矢野錦仙の下に合せた白襟に腮を垂れてクス／＼と笑つて居る。

「けれども彼の學校からは時々思ひ切つた事をする生徒が出て、生きた婦人問題が喧ましく新聞で謳はれるではありませんか、則ち成島君の教育がまだ全然良妻賢母主義に化せられて居ない徴でしやう。基督教の教育にはどうも何處かに癡い處があるやうに思はれますね。」



「先生は女子大學からあゝいふ新模型の婦人が生れるのを基督教的教育の結果と思はれるのですか、何時か彼の學校の生徒で沙原で情死をしかけた處女の噂が非常に喧ましかつた時に、例の大隈伯が女子大學からあゝ云ふ女が現はれるのは成島君の基督教的教育の結果だ。日本の女子教育はどうしても宗教の立場から行つてはならぬ。純粹の科學を教へなければいけないと云ふ事を演説した、私はどうしてもあの説には服する事が出来ません。基督教は今日に於てもうスツカリ日本社會の風俗習慣と同化して仕舞つて、少しも危険な分子はない。

今日私は基督教徒ですと云ふ事は、寧ろ安全な社會の旅行券であつて、決して其人の生活に何等の影響があるのでもない。第一成島が女子大學で成功したのは、一方に基督教といふ旗を振り廻したからではありませんか。

私は、女子大學が時々解放された婦人を産むのは科學教育の結果と思ひます。恐かなる日本の文部省は基督教の思ひべく恐るべきを知つて居るけれども、未だ實科教育の恐るべき事を知らないのです。

恐る可きは科學です、凡そ國家社會にはキツト固有の教化といふものがある、教化の世界は虚偽の世界で、私達は科學によつて何時の間にか此教へられたる世界の上に、更に眞實の世界を觀ることが出来るのです。

文部省は昔ひどく基督教を嫌がつて、頻りに實科主義を採つたのです、處が其基督教がものゝ十年とも経ぬ間にスツカリ日本化して仕舞つて、今では科學が盛んに個人意識の種を蒔いて居るではありませんか。

黎明の新しい光は二十年來の科學教育によつて放たれたのです。」

憊う云ふ間にも辻村は始終路子を忘れる事が出来なかつた。路子は華奢な指先に力を入れて、甘くナイフを運んで居る、肉の脂が紅を解いて



唇には、處女の光澤が鮮やかに浮んで居る。

「辻村君は女子大學の話といふと非常に興味を持つ癖があるね、君は何でも獨断で凡ての事柄を面白く詩的に解釋するけれども、彼女等は何も君の云ふやうに科學教育の結果、自己意識の域に到達したもので何も無いよ。」

彼女等は世間の所謂ハイカラーに止まつて、唯新しき時代の新しき装ひを凝す人達に過ぎないのさ、彼女等の足は依然として君が謂ふ教へられたる世界から一步も出て居ない、虚榮の亡者ぢやあ無いか。

實に彼女等は軍人か外交官の妻になることを以て、人生最終の目的でもあるかのやうに心得て居る……」英二の皮肉は一呼氣ごとにさびしくなつて行く。

「英二様、そりやあ餘り可憐そうだは………まさか………私の學校に

限つて何んな人だつて軍人……」と云はうとしたが、路子はフト自分の亡き父が軍人であつた事を想ひ起して流石に云ひ淀んだ。

「僕はどんなハイカラでも保守黨よりは好きだ。君の云ふ通りハイカラ其ものには何の意義も、何の價値もないだらう、けれども之を一つの社會的事實として見たならば大いに考へなければならぬと思ふよ。」

今日のハイカラと云はれる青年は識らずの間に古い社會の習慣から離れて、新しい生活の形式を覺えた人達だ。けれども此人達はまた新しい生活の意義を知らぬよ。

輕薄なハイカラ男女も過渡社會の事實として見れば、爾んなに馬鹿にしたものぢやあないよ」辻村が口を出すと話題が直ぐそれからそれへと遷つて仕舞ふ。

路子はもう何時の間にか辻村の雄辯の捕虜となつて居た。長兄の處へ



集つて来る青年の群も随分話は好きだ。路子は長兄の處へ来る客の爲に度々食卓の用意をするので若い男の間に立ち交つていろ／＼趣味の深い話を聞く機会も自然多かつた。けれども今此處で聞くやうに、胸に血汐の湧き立つやうな、何とも知れぬ響のある談話を聞いた事はなかつた。處女のやさしい眼には、新しい世界の美しい影がハッキリと映つて来た。

(六)

午後九時半、路子と辻村とは一處に栗野の家を辭した、誠一夫婦と英二とは灯を持って暗い玄關まで送つて来て呉れた。

『お宅は江戸川の邊ですか、新小川町……彼處に朋友が居てよく訪ねて行つた事がありました』と二歩三歩先になつた辻村が振り向きながら尋ねる。

『爾うで御座います、新小川町の交番から左へ参りますと直ぐあの街路で……』間が悪そうに跡から護謨草履の音も忍びやかに付いて来た路子が答へた。

『栗野君は時々お宅へ参りますか。』

『え、……此頃は餘りお見えになりませんが、學校に入らした



時分には兄の處へ毎日のやうに遊びにお出でなすつたんですよ。」

「ぢやあ栗野君の戀愛問題は好く御存じでしやう。」

「えー……。」と微かに答へたが路子は流石に云ひ淀んだ。

「彼の事はよく栗野君から聞いて知つて居ますよ、栗野君の戀人といふのは貴女のお友達だつたんでしやう。」

「私が附屬に通つて居ました頃は、毎朝同伴で御座いましたの、武島町に居らしつて宅へ、始終遊びに入らつしやいました。」

「英二君が其女に戀して居た事は早くから容易に分りませんでしたの、」

「否、それがあの英二様の事ですから容易に分りませんでしたの、私共の方から見るとあゝいふ人に優れた才を持つて居らつしやる方が若し人を戀するとしたならば、どんなにか天才的な人を……と思ふもんですから」と路子はぞつと雅夫の顔を覗くやうに見た。

二人は何時の間にか肩を並べて區役所前の淡暗い街路を歩いて居た。俯向き勝ちの雅夫の眼には、路子の白足袋のチラ／＼と暗に運ばれるのが、夢のやうに映る。

友と戀の話をする時には、さもそれが古い經驗であるかのやうに語るのが雅夫の常であつた。けれども慙うして若い處女と同伴に春深き夜をそとろに行くといふやうなことは雅夫にとっては眞く生れてから初めての事であつた。

其頃は情緒一遍の小説が盛んに社會から持て囃されて、戀、家庭などといふ文字が、しきりに若い人達の胸に、新しい響を傳へた時であつたけれども、辻村は此都に伯父と呼ぶ只一人が小石川の林町にあるばかりで、十四の時に東京へ出てから八年のさすらひを、骨肉の温い情に饑えて居た。世間でやかましい評判の小説などを讀むで見ると、此都の



中等階級に生れた若い男女が互に相識り相語る機会を持つて居て、果ては楽しい戀に陥るといふやうなことが現はれて居る、雅夫は私かに自分の生活の寂寥を覺えずには居られなかつた。噫私のやうな孤獨者には、何時の日に爾んな嬉しい機会が廻つて來るのだらうと思ふと堪らなく寂しい日もあつた。

一步、一步が雅夫にとつては新しい生涯のやうに思はれた。

「ぢやあの英二君の戀人といふのは、爾んなに美人といふ譯でもなかつたんですね。」

「爾う云ふ譯ぢやありませんわ、……けれども宅の長兄なんか今でも不思議がつて居ますの、英二様みたやうな方がどうして彼女を戀したんだらうッて」と路子は雅夫が思つたほどに羞んでも居なかつた。

「何故でしやう、それとも他に目立つやうな缺點でもあつたのです

か。」

「否、只ね、英二様のやうな理想を持つてお出での方が……。」

「それぢやあ世間並の女だッたといふのですか。」

「英二様の所謂良妻賢母主義の方なのです。」

「だつて貴女の朋友でしやう。」

「けどもね、女には眞實の朋友で云ふものは少ないんですよ、附屬に居た時分の朋友で未だに交通をして居る方は一人も無いんですよ、情ないもんですわ……」

「お互に手をとつて泣くやうな朋友が出來たのは目白へ行くやうになつてからの事ですよ。」

暫くして二人は賑やかな神樂坂の街路へ出た、白熱瓦斯の光が路子の横顔を大理石のやうに照した。其處には路子と同じ年配の女が、男に手



をとられて睡しそくに話しながら幾伍もく行つた。けれども雅夫のやうに若い男と同伴に歩いて居るものは無かつた。努めて處女のやうに装ふた細君達は大かた振り向いて雅夫と路子とを見た。

雅夫は羞しかつた、けれども何とも知れぬ勝利の威が胸に湧いて居た。「でも何處かに人を惹き付ける才があつたと見えますね、英二君の戀は随分はげしかつたのですから。」

「夫やあ温順い女でした。」

何時の間にか二人は賑やかな街路を左に折れて眞暗な坂を江戸川の方へ下りて居た。路子の長い袖がともすると雅夫の手先に觸れる。

暗い坂は二人とも無言で下りた。

坂を下りると二人はまた話を初めた、路子は少し呼吸をばづませて居た。

「ぢやあこれで失敬します。」

「どうも失禮いたしました、何うか英二様と御同伴に御出で下さい。長兄も居ますから……」路子は一禮して小さい辻を左に東五軒町の暗に消えた。雅夫は止つて路子の後姿を街燈の影に見送りたかつたけれども強て江戸川橋の上まで歩いた。

雅夫は急に寂寥を覺えた、噫、是からまた伯父の家へ歸るのかと思ふと冷めたい巖窟の中にも引き入れられるやうな氣がして、思はず橋の欄干に倚つて路子の家庭の樂しさを思ふて見た。

江戸川は暗の中に聲を呑んで逝く、兩岸の青葉は濃腕と夜の露に包まれて、其間に續く街燈の光が蒼白く輪に映つて靜かに水に落ちて居る。噫、栗野は幾度も靜かな夜を、此橋の上に停んで例の歌に煩悶を忘れやうとした。栗野と安城と自分と三人して郊外の草に俯つて語らふた時



安城がよく栗野の爲に彼の歌を獨唱した。安城は非常な美音を持つて居る。安城の獨唱を聴くものは誰でも其滑かな一本調子のうちに籠つて居る云ひやうのない高調の悲哀にうたれる。いま辻村は靜かに其一節を口ずさんだ。

「あゝこの文字の永劫に、  
消えじと聞かばわが戀の  
足らんを、若しや夕潮の  
頭もたげて寄せもせば。

歸れ戀人、唇は  
胸のほのほに濁きたり、  
君かへり來むその日まで、

また花びらに觸れもせじ」

此歌を誦して見ると雅夫いまさらのやうに自分の心の變り果てたことを深く感じた、曾ては悠ういふ優しい戀の歌が、若い人達を深く動かした時もあった。噫、自分も其人達の群と共に新しき戀の歌に酔ひしれた事もあつたと思ふと辻村は此頃の心の變化を泌みくと感じたのであつた。



(七)

雅夫が路子を送つて江戸川で別れた翌々日、優しい女文字で認めた、綺麗な風景畫の端書が雅夫の机の上に置れてあつた。

雅夫は林町の伯父の家へ歸ると直ぐ路子に宛て、何の意味もない手紙を書いて見やうかとも思つたけれど、また嫌な意味に解られて、返事を其儘にされるやうな事でもあると口惜しいと思つて止めにした。雅夫は人と思ふはげしい情に動かされる事は度々あるが、何時でも恚う云ふ風に自分といふ冷めたい情の爲に壓へられて思ひ切つた事が出来ないのである。

路子の端書には淡泊とした文句で昨夜の挨拶が書いてあつた。伯父の娘の小夜子も手紙は自慢である。けれども、小夜子のはなべての女學生

が好く做る鴛堂の手紙で、雅夫は小夜子の處へ其學校友達から寄せて來る手紙のどれもが皆同じ型にはまつて居るのを見て、女學生といふものは皆同じ文字よりほかに書き得ないのだらうかと思つた事もあつた。路子の手紙は破格であつた。雅夫は達者に書き流した路子の繪端書を幾度も読み直して居るうちに、其人の個性が録型のやうな今の世の學校教育を破つて、動いて居るやうにも思はれて、無暗に嬉しかつた。

雅夫は獨でいろんな理窟をつけて路子を才ある女にして考へて見た。是を初めとして、雅夫と路子との間には親しい便が交されるやうになつた返事を遣れば、暫くしてまた書いて寄す、此頃はどうしたのだらうと思ひ出す様な時、青年の云ひしれぬ寂寥を感じるやうな時には、用もない事を長々と書いて遣るといふ風で、或る時は雅夫も、恚んなに便を繁くして西村の家族は、何と思つて居るだらうなどと氣遣つて見た事も



あつた。  
 尤も兩人の手紙は誰の前で讀まれても決して羞しいやうな、後めたいやうなものではなかつた。

雅夫が假りに路子をはげしく戀してゐたとしても、我から其前にひれ伏して戀の奴となるのは雅夫にとつてはどうしても出来ない事だ。雅夫には恐ろしく根強い此國の教化のうちに育てられた女性が、どうして其教へられた世界から踏み出して、眞實の世界を知ることが出来るやうになるか、其心の経路が觀たいといふ一種の好奇心もあつた。されば雅夫は自分ながら極端な、過激な説と思ふやうな事でも路子への手紙には遠慮なく書いてやつて、柔い處女の心に新しい眞理の影が映つて行くのを私かに快しと思つて居たけれども、此好奇心はいふまでも無く、雅夫の路子に對する全てとはなかつた。

寂しい日に書き送る異性の友のある事が雅夫にとつては深い／＼慰籍であつた。

路子の手紙には『犠牲』と云ふことが好く書いてあつた。雅夫は女子大學の校長が好く犠牲といふ道徳を説くことを聴いて居た。路子が犠牲といふ事を口癖のやうに云ふのは、其受賣たなど心あかしくおもひながらも『犠牲』は奴隷道徳であるといふに、けなした上になが／＼と其理由を書き送つた。その内には希臘人は『善』と『美』との一致といふ事を理想とした。希臘人が大理石に彫刻した裸體婦人の筋肉の圓満な發達は其理想を表はしたものである。ユーゴー先生の小説『悲惨』の中に出てくる聖人ミリエルの姉バプチスチンは終生嫁がず、自己の快樂を犠牲として貧民の爲に盡した基督教の理想的人物である。けれどもバプチスチン老嬢の蒼白く憔悴果た顔色はどう考へて見ても『美』とは思はれない。『犠牲』



といふことは個人と社会との衝突を隠蔽よく言ひつくらうたばかりのこと  
 とで決して永遠の道ではないと云ふやうなことが、如何にも若い人の心  
 を惑はすやうな美しい文章で認めてあつた。けれども雅夫は路子の心を  
 惹きつけたい爲に美しい文章を書いたのではない、誰に宛る手紙でも雅  
 夫の筆は常に美しく流れて居た。

恁んな理窟ばい手紙の遣り取りをして居る間にも兩人の親しみは次第  
 に増して、遂には云ひ合せて郊外を散歩する程になつて来た。

其年の秋の半であつた。兩人は土曜の午後を自白の停車場に待ち合せ  
 て落合村から中野の薬師まで歩いて見たことがある。學習院も支那人の  
 學校もまた其頃はなかつた上に、山の手線も單線で、市の人もいまのや  
 うに此の邊まで散歩に来る人は少かつた。

兩人は若やかな話に二里近い路を知らずく行きつくして四時頃、中

野から薄機ない甲武線の汽車に乗つて新宿に歸つて来た。雅夫の紺足袋  
 には灰のやうな平原の塵埃が積つて、プラットホームに立つて居るのも  
 術ない程に疲れて居た。路子の前髪もやゝ亂れて、蒼白い顔に眼の縁が  
 何時になくホンノリとして居た。

路子は其まゝ汽車で牛込に歸つた。雅夫はひとり山の手線に乗り換へ  
 て巢鴨まで行かねばならぬ。單線のために品川から後れて来る列車を此  
 處で三十分ばかり待ち合はせた。

廣い構内にはいさ機械油と煤煙の眞黒に潤みた驛夫が信號旗を持つて  
 八王子行の貨物列車に汽鐘を付け換て居る。運送會社の入夫が忙しそ  
 うに相包を積み込んで居る。雅夫の立つて居る直ぐ前を汽鐘車が苦しそ  
 うに喘ぎながら通る、臭い泥炭の煙がバツとプラットホームにかゝつた。  
 煙を透して秋の夕日が黄く、人の影を寂しそくに地に映して居る。



雅夫の眼には今日必みくくと見た路子の横顔が瞭然と浮んで来た。好く見ると鼻の邊に雀斑がボツ／＼あるのと、血色の好く無いのとで年齢よりも三つ四つ老けて見へる。唇に智慧の寂しさが溢れて、黒曜がらの氣持ち釣り上つた眼つきなど凡て印象の深い顔ではあるけれども、何處かに物足らぬ處がある。

路子は級の首座を占めて居る才媛と聞いたが智慧の溢れた顔といふものは慙うも寂しいものか。といふて路子は誰に見せても決して醜い女ぢやあなう。

雅夫の想念の隅には何時の間にか小夜子の鮮やかな、肉付の好い顔が忍び込んで居た。けれども流石にそれは無意識のことであつた。

路子の顔には處女の光が無い、無論路子の純潔は誰しも疑ふものはないけれども、路子の顔には少くとも處女らしい光が無いと雅夫は考へて

居た。

汽車は何時の間にか雅夫を曠い池袋の野に運んで居た。遠く難町の方に續く櫟林の上に幾重にも覆いた葡萄色の雲の間からいま落ちやうとする日の象が洩れて、浴爐の鐵のやうにあか／＼と、力なき光を尾花の原に投げた。

「社會の先導となつて貧困と戦つて行く者の妻はどうしても、彼いふ女でなければ駄目だ。」雅夫は強く私語いて、車の窓を落すと、そのまゝ、其處に俯伏して深き思ひに沈んだ。



(八)

洋燈をつけると雅夫は蚊帳の釣手をつはつして、机の前に座つて見たけれども、暑苦しいのと、頭痛がして仕方がないので、前の雨戸をつと二枚あけて、窓を開け放した。

洋燈の光が庭の植込を朦朧と照す、建仁寺垣を越して向ふの家の軒燈に壁虎の影がハッキリと見へて居る。

空は陰氣に曇つて風は些とも動かない、何處ともなく蚊の鳴く聲が耳に付いて起きては見たが、胸の苦痛を何に紛らそう術もない。

雅夫は強て眠らうとしたが神経が高まつて、どうしても眠られないので、何うせ一度は嫌でも書き送らなければならぬ親への通知を今夜一と思ひに認めて仕舞はふ、爾うして居るうちには夜も明けるだらうと思つ

て起き直つて見たのであつた。暫く忙然考へて居たが雅夫は嫌々机の抽斗をあけて巻紙を取り出そうとすると、其處に一週間ばかり前に来た路子の手紙が入れてある、破れた封筒の口をあけて雅夫は無心にそれを読み直して見た。

休暇になりましたからは、暑い〜と毎日同じやうな事を繰り返して只怠けてばかり居ます。此頃弟と縁日から買つて参りました鈴蟲が、暗い處へ置きますと晝も好く鳴いて呉れますので、幾分か暑くも忘られるやうな氣が致します。

私は貴郎を師の君とも、兄上ともひたすら御頼み申して居ますので私の一身上の事はこんなつまらない事までも申し上げて、御教を乞はなければ氣が済みません、どうぞ笑はないで眞面目に聞いて頂きたく御座います。私は此頃母から非常に結婚を勧められて居るので



あります、先方は有福な銀行員だとか申しまして母も親類も非常に熱心に勧め呉れるので御座います。  
私の心はと申しますと、無論いまだ結婚したくは無かったので御座います。第一學校も途中で御座いますし、それから多少は生活の趣味といふやうなことも思ひますので、私にとつては、只安樂な家庭生活といふ事が人生の至てとは思はれないので御座います、此點は貴郎も深く御同情下さる事と信じて居ます。

けれども私はまた感ひます、貴郎の思想に感化されて來た私には或る人達のやうに宗教上の信念と云ふものがありませぬ、只在りのまゝなる自然と人生とに憧れて生きやうと云ふ私には基督教の尼様のやうな獨身生活を送り得られるかどうか所詮自信は御座いませぬ、さすれば一度處女としての結婚期を失して、他年後悔するやうなこ

とはありませんでしやうか、これも疑問であります、私はいま感ふて居ます。

貴郎の情理合せつくした、思慮ふかき判断は必ず直に私の心を決めさせて下さるに違ひない事と信じて居ます、どうぞ御教を願ひます。栗野先生の一家は皆鎌倉に避暑中の由、先日は夫人から御手紙で、今年も來ないかといふ事で御座いますから、其内母の許しを得て是非参り度いと存じて居ます。都合によつては只今申し上げましたことも先生に御相談を願つた上、母を説いてもよろしいので御座います。

切に御返事を待ちます。

七月二十五日



雅夫様

読み直して見ると、二三日前に平氣な顔で返事を書いて遣つた此手紙に、路子の心の深い秘密が含まれて居るのではないだらうかと云ふやうな疑問がふと胸に浮んで來た。

「路子はふと私を戀して居るのでは無いたらうか、あの智慧のさみしさが溢れるやうな、落付いた顔の底にも人知れぬ情の焔が燃え立つて居るのではあるまいか、爾うして此手紙の眞意は、若し私が彼女を許すと云ふならばキツバリ母親に反對しやう、母親の言ふことを却けたばかりで、私が結婚を承知しないやうでは困るといふのではあるまいか。

果してそうとしても路子の戀は寂しい戀だ、怜悧な戀だ、何となく物足りない。」雅夫は机の上に俯伏して慙んな事を考へて見た。  
考へて居るうちに雅夫の想念はまた落第といふ嫌なことのの上に遷る。

爾うして今度は、自分の從來の自惚に満ちた生活がほとく情なくなつて來て、何處までも自分が詰らない者のやうに見えて來る。

「噫、世に自分程驕慢な、淺薄なものが又とあるであらうか、自分はいさ何れ程の勉強をして、何れ程の事が出来るか、少しばかり筆が廻るのを好い事にして何と云ふ不眞面目な遣り方だらう、自分は當然落第をさせられるだけの資格を持つて居る、いや單に學校の落第者といふばかりではない、社會生活の落第者だ。

それから恐ろしいのは自分の虛榮心だ。自分の生活は殆ど偽虚の凝結ともいふべきではないか、小夜子に對する愚かなる戀は何うか、路子に對する勝手な舉動は何うか、自分ながら愛想が盡き果てる、自分の腹を立ち割つて卒直に白狀すれば、此辻村雅夫は小夜子に一も二もなく惚れて居るのではないか。



惚れて惚れて、惚れ抜いて居ながら、また一方から自分勝手な理窟をつけて、強て惚れて居ないとしやうとするのは何たる淺蕪な智慧のわざだらう。あのマガレットに華美なりボンを着けた小夜子の、成熟した肉の香が知らず／＼自分に感應して居るのではないか、婦人も個人教育を施して、人間としての自覺を興へなければならぬ、婦人が甘つたれて情を衒ふのは、男に食はして貰はねばならぬからの事だと、新聞や雑誌で大語した自分が、何故小夜子の媚るやうな恨むやうな艶かしい語に胸を蕪かすのだらう。

そればかりならば未しも、自分は今迄儘に路子を誘惑して居た。路子の高潔な心と才學と兩つながら私かに感心して居ながら何處か物足ぬやうに覺えて居たのも、今から考へて見れば、路子の顔に肉の香のないのと、少しも情を衒ふやうな態度のない故であつたに違ひない。

路子は立派な婦人だ。今も自分は此手紙に就て彼女の心を枉げて解釋して見たではないか。噫淺猿しい、純潔な處女の心を惑はして置きながら、二三日前にやつた此手紙の素氣ない返事はどうであらう、路子はどんなにか自分の無情を悲しんで居ることであらう、自分はどうしても路子の前に跪づいて罪を謝した上に、誠心をつくして彼女を愛さなければならぬ。

自分も餘程馬鹿だ。彼の伯父の俗惡な生活に憎れた、虛榮心の凝塊見たやうな小夜子がどうして自分の戀を容れて呉れるものか、路子のやうな女でなくて、誰が自分のやうなもの、生活に同情して呉れるだらう。私は今から路子の前にひれ伏して、從來の罪を謝らなければならぬ。

噫悪いことをした。私は知らず／＼一人の處女を誘惑して来てそれを斷崖に突き落そうとして居たのだ。



私は落第といふ不名誉を、先づ路子に告げなければならぬ。爾うして、羞しい人生の落第者として、路子の前にひれ伏してその憐憫を乞はなければならぬ。」

雅夫は何時の間にか路子に宛てる手紙を書き初めた、机の下から襲ふて来る蚊の群に悩まされながら、一行また一行はげしい感情をあらわし筆に行つた。

路子様、私はいま胸を掻きむしられるやうな悔恨と、漸愧の情にうたれながら此手紙を書く。

私は落第しました。私は今更、過去の不真面目な學校生活を悔めるの情に堪えません。天は此驕慢兒を罰する爲に尤も不名誉な落第といふ鐵鎚を私の頭上に下したのであります。御覽なさい、見事に粉碎された私の生涯を、かくして私の殘骸は、恐ろしい暗黒の底に葬られて

行くのです。

貴方は此淺猿しい落第者の云ふ事とも知らずに好く私のいふ事を信じて、聽いて下さつた。私は過去二年にわたる貴女の友情をあらためて茲に感謝すると共に貴女を欺いた私の罪をふかく懺悔しなければなりません。私は心の底で貴女の才學を慕ふ情につれて、情慾、谷間の白百合の花とも見ゆる貴女の姿に深く心を悩ましながら淺薄な虚榮心に驅られて、私から貴女の前に跪つて、其許容を受ける事が出来なかつたのです。虚榮と虚偽とにみち／＼た都の中に何うして私のやうな世間の惡まれ者に同情して呉れるものがありませう。何うか思ふ存分私の見苦しい態を笑つて下さい。けれども只私が貴女を想ふて居た衷情だけは諒として下さい。

噫落第者、私はもう孤獨です學校も斷然廢めます、廢めて紅塵の中



に闘つて深く倒れたいのです。今になつて願ふと、過去の夢がし

みく戀しいではありませんか。

路子様、貴女はかくても猶、此愚かなる男の爲に、一滴同情の涙を

八月三日 夜

終に眠らず

雅夫

路子様

雅夫は急に世界に自分が孤獨のやうな気がして來た。往來する友達も  
多いけれど憊うなつて考へて見ると人間といふものは所詮孤獨のものだ  
といふ事を泌みくと感じた。

雅夫は心から路子に懇めて貰ひ度くなつて來た。

五位鷺が鳴いて、鷄聲が窪の街道には板橋在から出て來る肥料車の音

がする、もう程なく黎明だ。



昏 黄

暗闇坂と此界限で呼ぶ小石川白山の裏から原町へ抜ける鬱然とした楓の杜を雅夫は静かに下りて行く。洗ひ曝した白地の浴衣に墨色の汚點の着いた小倉の袴を穿いて、細身の洋杖を抱へて居る。八月の朝日が葎の葉越しに射し込んで雅夫の浴衣に青い波紋を映すのにも午の暑さが偲ばれる。

頭の上ではもう蟬が焦き付けるやうに鳴いて居る。

雅夫は今朝早く牛込の安城を訪ねて、成績のことを儘めて見やうと思つて居たけれども、今更未練なことゝ氣が付いたので白山から引き返して林町の伯父を訪ねる所である。

『澤田新三郎』といふ見事な表札の懸つた門を入ると昔の青く蒸した

昏 黄

昏 黄

前裁に敷石が舖めてある。植込をぐる／＼廻ると寒竹の影に華奢な玄關が見へる。馴染の車夫がいま玄關の敷石に水を流して、竹箒でザブ／＼と洗つて居る所である。

「ヤア辻村様!!!」と車夫は宛然自分の朋友のやうに呼びかける。「夫人は未だ沼津の方へ入らつしやらないの」と雅夫は分り切つて居る事を聞いて見る。

「未だ……」と、力なく云ふて意味ありそうに笑つて見せる。雅夫は伯父の家を出て、原町に下宿をするやうになつてからは、餘り足繁く此處を訪ねても見ないけれども。故郷の親父への義理で、月に一回位ははどうしても訪ねなければならぬ事になつて居る。

暫時別れて此處の奉公人の顔を見る度に雅夫は何だか淺猿しいやうな氣がして仕方がない。あんなに陰では主人の悪口を云ふて居ながら未だ



相變らず使はれて居るのか、それならば男らしくあんな不平を云はなければ好いのに」と思ひながら雅夫は車夫に諾づいて、態と玄關から入らず、右の木戸を開けて内玄關に立つ。

涼しそうな葎戸の影から女中が見付けて「まあ辻村様！随分久し振りね。」と云ひながら愛相よく迎へる。

「え、試験があつたもんですから」氣の無い返事をして、「伯母様は御在宅でしやう。」と改めて聞いて見る。

「入らつしやいます。」と云ひながら、女中は別に取次がうともせず、雅夫を直ぐ茶の間の方へ連れて行く、此間まで自分の同居した家ではあるけれども下宿から來て見ると何時も御殿に伺候した時のやうな不安を感ずる。

大家は盛夏の日でも冷々とした穴藏のやうな空気が肌に沁みる。雅夫

は何となく榮華の寂しさといふやうな事を思ひ出した。

茶の間には青貝摺りの書棚があつて、新しく届いた諸会社の決算報告書が、帯封の儘、雑然と置いてある。其上に某實業雜誌社から出る「婦人世界」と「食道樂」とが載せてある。女中に導かれて入ると葎戸の影に澤田夫人と娘の小夜子とがさも忙しそうに中元の贈物を拵へて居た。柳行李の蓋には白木屋の正札の付いた浴衣地が幾反となく詰め込まれて、切り放した水引の端が八疊一面に散らばつて居る。

「伯母様どうも御無沙汰致しました。」と雅夫は何處か滅入つた挨拶をする。

「おや！雅夫様でしたか、恁んな面倒な仕事が残つたものですからね今小夜ちゃん……」と云ひかけて、反物にかけた水引にギユツと力を入れて結んだ「大騒」をして居る處なんですよ、もう直ぐ終結ですから一



寸待つて下さいね。」

小夜子は何うしたのか妙に鬱ぎ込んで居る。それに今日は珍らしく束髪を解いて、唐人髷に結ふたのは好いが、目立つて設い生際に態と剃刀を當てないので、前髪がハラ／＼と蒼白い額にほつれ懸つて居る。それがまた雅夫の眼には何とも知れぬ強い感情を惹く。何時ものやうな處女の牙々とした色もなく思ひなしか腫もうるんで、氣の無い挨拶をする。其儘眼を母親の手許に落して居る。雅夫は小夜子が何故恠う急に冷淡な舉動をするのか分らなかつた。若しや何處かで自分の落第した事を聞き知つて、もう自分を蔑んで居るのではあるまいか。随分男性の才氣を萎ふことのはげしい女だから爾ういふ事を聞いたならば、また人一倍失望する事もはげしいだらう。

『どうしたの、雅夫様、酷く顔色が悪いぢやありませんか』と夫人

高子は何時の間にか、其處へ散らばつて居る熨斗や、水引を片付けながら向き直る、先刻の女中は藤村の羊羔に茶器を運んで来たが、其足で反物の入れている柳行李を重さうに戸棚に仕舞ひ込む、小夜子は一吋會釋して素氣なく自分の部屋の方に立つて行く、雅夫はもう何だか非常に冷遇されて居るやうな氣がしてならぬ。

『昨夜よく眠られなかつたもんですから……』雅夫はもう思ひ切つて落第の事を話して些とでも早く歸つて仕舞ひ度いと思つたのである。

『また小説でも読んで夜更かしをしたんぢやあ無いの?』

雅夫は何だか伯母に嘲笑されたやうに僻んで見た。

雅夫の父は豊前小倉の舊藩士で維新の頃、いろ／＼な事業に手を出して財産を失くして仕舞つたが、もとより土地の人望家で村長に推舉されてから二十年來まだ一度として其職を辱めた事はない。



其昔當家の主人澤田新三郎が早く東京に出て芝の新錢座にあつた福澤の塾に通學したのは雅夫の父親が學費を仕送つたので、雅夫の父は其頃から非常に新三郎の才氣を愛して居たのである。尤も新三郎が雅夫の父親から學費の補助を受けたのは二年間ばかりの事で、其後辻村の方には事業の失敗やら、種々の事情があつて、學費の仕送りは絶えた。新三郎はそれから其頃の書生が好くやつた苦學生といふものになつて勉強したが、福澤の塾を出ると其儘今の三菱に雇はれる事になつた。

新三郎が雅夫の父の補助を受けたといふ事はあまり世間に知られて居ないけれども、新錢座の福澤の塾で非常な苦學をしたといふ事や、「西國立志傳」などの感化を受けて、十年一日の如く事務家として驚くべき勤勉な生涯を送つて來たといふ事は實業雜誌などに幾度となく特筆されたので世間の人々も好く知つて居る。新三郎も今では三菱合資会社の専務取

締役で、自宅では宛然殿様見たやうな生活をして居る。

雅夫は豊前、豊津の高原に人となつた。父は小倉の城主小笠原大膳大夫に仕へて御鷹匠、御書院番を勤めて、漢詩人としても相應に有名な人であつた。雅夫は父の高尙な氣品と、涙もろい母の美しい情とに感化されて少年の時分からとかく空想勝に育つた。それに豊津高原の麗しい自然の景色が此空想多き少年の夢に入つて、十四歳の春、東京の伯父と呼ぶ新三郎の家に預けられた頃はもうまぼろげながら人間の型が出来上つて居たのである。

けれども新三郎は愚か、故郷の父親さへも爾ういふ事には氣が付かなかつた。

澤田も會社では非常な勢力家であるけれども、年を老るに連れて自分の生活の寂寥を覺えずには居られなかつた。長男の勉は未だ眞の少年で



海のものとも山のものとも分らない、爾うかといふて勉が一人前に成る迄には、自分の身體の健康も思はれるし、今の書生は法律だとか経済だとか、稍ともするとむづかしい理屈を盾にとつて長上に逆らて見る事は好きだが、實務を遣らせて見ると、何一つ満足に出来るものはない」と好く雑誌社の訪問員に話すけれども、此頃になつて願ると自分の下役に使つて居る重人物は皆法學士といふ蟲の好かぬ肩書のある奴ばかりである。それを想ふと何とも知れぬ不安の想が胸を衝いて湧く。

雅夫は出京して駒込の中學校へ入學する事になつた。新三郎は雅夫の學校の成績が非常に優れて居るのを見て私かに少からぬ望を囁して居た。行末は高等商業學校にでも入れて、自分の開拓して来た三菱の勢力を出るだけ多く雅夫に譲つて置き度といふやうな事も蔭で高子に話した。雅夫の父は或る時新三郎から學費も此方を出してやらうかといふ意味の

相談を受けなければ、流石に我が子の幸福を思ふて、それは體裁よく斷つて仕舞つた。

雅夫が伯父の家庭生活をよく知つて來るに連れて、自分が慥う云ふ社會に到底用のない人間であるといふ事が瞭然と覺られて來た。中學校を卒業すると伯父は一人で定めて高等商業學校へ行つたら好からうと云ふ。伯母も蔭から頻りに勸めて呉れた。

仲の好い小夜子までが兩親の云ふ事を聞いて呉れれば好いがといふやうな態度を見せた。

雅夫は惑つた。

少からぬ煩悶の末、雅夫はどうしても文學を修めたい、商業のやうな活潑な職業は自分に適しないといふ事を決然と伯父夫婦の前で應へた。雅夫は依然伯父の家から早稻田の文科へ通ふ事になつた。けれども此時



から伯父夫婦と雅夫との間には到底近づく事の出来ない溝が作られた。雅夫の生活は急に寂しくなつた。寂しくなるに連れて小夜子の優しい同情と、華美な姿とが諷かに雅夫の生活を慰めて呉れた。けれども夫すら終には堪えられなくなつて来た。

雅夫が穩やかな口實の下に伯父の家を出て近い原町に下宿生活を初めたのは、去年の春の半であつたが、雅夫と路子との交情は此頃漸く熱して来たのである。

恚ういふ關係からして伯母の前で私は學校を落第致したといふ事はなかく雅夫の口から云ひ悪い事であつた。殊に伯母は女だけに雅夫の真心を了解する事も出来ず、雅夫が新三郎の好意を無にして文學を修めると言ひ張つた事を、自分の顔でも踏み付けられたやうに感じて居る。

「實は年度の試験を失敗つて仕舞つたもんですから……」雅夫は思ひ

切つて云ふて仕舞つた。

「えー落第したんですか」伯母も流石に意外であつたらしい。

「爾うです。」

「何うしたんでしやう雅夫様！ 貴郎が……怪しいぢやありませんか。」

「私も實に意外でした。何が悪かつたんですか自分でも更に分らないのです。」

「眞實に怪しいは！ 雅夫様……」と云ふて氣の毒そうに笑つて見せた。

高子夫人は最早四十歳に近い。顔は始終念を入れて化粧つて居るけれども、争はれない小皺が目縁を刻んで、左の蜂谷の處に、鉛毒といふのか、淡い黒子のやうなものが残つて居る。封筒同様な出入の女どもにチャホヤされるのが嬉しくて、只もう自分の夫を中心として宇宙を解釋



して居る此人の顔を見ると雅夫はいつでも眼も意氣地も無くなつて無暗に泣きたくなつて来る。

『除り意けて仕舞つたもんですから……』

『だつて雅夫様、文學は御得意ぢやありませんか。高子は爾んなに深い意味で云ふたのでも無かつたらうけれど、雅夫には夫が酷い嫌味のやうに思はれた。』

其處へ新しい顔の小間使が出て来て、『彼のお客様が夫人にも御目に懸り度いとお仰しますそうで……』

『爾う……』と高子は應へたが、一寸眉根を凝めて見せた。

(十)

茶の間から洗面所へ傳ふ椽先には華奢な簾が懸つて居る。焼杉の庭下駄を穿いて、飛石傳ひに花壇の方に行くと松の葉の香がして、油蟬が鼻先を蟻々としてかすめた。

雅夫は何だか自分が非常に冷遇されて居るやうな、見捨てられて仕舞つたやうな氣がして仕方がない。

花壇の椅子に突つて、雅夫は見るともなく、前の草花に眼を落した。花壇の夏花はいま漸く二分通り開いた處である。慙うして折角植木屋を使つて春に種を蒔いて置いても、美麗な花の咲く時は皆沼津の別荘へ行つて仕舞つて、見る人は誰も居ない、人間のする事は大かた慙んなものかと思ふと雅夫は何となく情ないやうな氣がして來た。



「小夜子はどうしたらう、何時もなれば最早とうに此處へ來なければならぬ。彼の六疊の軒先から好く散歩に出た事があつた。

今日はどうして、あんな冷淡な舉動をしたのだらう、伯父と別れるやうになつた事に就てもあれ程同情して居て呉れた人が、假りに自分の落第した事を何處かで聞いたとしても、爾んなに蔑む程の事もなからう。

私と伯母夫婦との間にあゝいふ感情の行き違ひが出来てから、伯母が小夜子に私と親しくする事を禁めたのではあるまいか。慥んな事を思ひながらも雅夫は白いペンキ塗の椅子に腰かけて小夜子の來るのを心待にして居た。

大きい山蟻が椅子から雅夫の膝の上に這ひ上つた。前には赫々と照る夏の日、燃え立つやうな虞美人草が眼の覺るやうに咲いて居る。

「辻村君は犬の交尾んで居るのを見ても、之をダーキンの進化論から

説明して來なけりやあ氣が済まない男だ。」と或る時安城が例の誓句を吐いて、丹波鬼灯の濃んだやうに、眞赤な顔をして笑つた事がある。雅夫も自分ながら自分の批評性のはげしい事を淺猿しく思ふ事が度々ある。近くは路子に對しても爾うだ。心の何處かの隅に冷めた批評の針を隠して居る。處が不思議に小夜子の姿を見ると其批評性が跡もなく解けて仕舞つて無暗に嬉しくなる。

雅夫は何時の間にか戀の深淵に陥つて居たのである。

雅夫が駒込の中學を卒業して、伯父夫婦から將來の志望に就て種々な相談を受けて居る頃の事であつた。王子にある有名な實業家の別荘に開かれる園遊會に行かうと云ふので、長閑な春の日を伯父の一家は朝から其準備に懸つて忙しかつた。雅夫は伯父から受けた相談と、自分の理想との衝突に悶え苦しんで居たので、伯母の高子が朝から臺處へ出て、女



中を叱つて居る痴高な聲を聞くに忍びなかつた。

奥庭の茶室の裏に小さい稻荷の祠がある。雅夫は其祠の石に腰を下して、其頃行はれた有名な詩集を開けたまゝ、忙然、自分の行末の事を考へて居た。文學と實業、理想と生活といふやうな問題が限りもなく幼稚な青年の頭腦をなやますにつれて、小夜子の姿がをり／＼其煩悶の中に現はれて空想の絲は果しもなくもつれて行くのであつた。

「まあ恁んな處に居て！私、随分探したわ、小夜子はもう園遊會に出掛けるばかりに化粧をして居る。雅夫は之まで幾度か小夜子の盛装した姿を見せ付けられた。爾うして見せ付けられる度に何とも知れぬ一種の恐怖を覺えた。

『満鑑飾ですわ。』雅夫は精一ばいで云ふて見た。

『好くつてよ、貴郎に爾んな事、云つて貰はなくつても——』

『伯母様は』

「之から化粧よ、だつて未だ九時前ぢやありませんか。』小夜子は優しく笑つて見せた。

「何うして昨日はあんなに園遊會を嫌がつたのですか、好いでしやう恁んなに綺麗にして……」小夜子はどうしたのか非常に王子の園遊會に行くのを嫌がつて、高子夫人に叱られて居た。

「話らないは、あんな處へ行つたつて面白い話があるので無し、來る人も嫌な事ばかり云ふて居るんですもの。」

「爾んな事を云はないで、従順に好きな長唄でも聴いて來たら好いでせう。」

「だつて妾、悲しくなるんですもの。」と、小夜子は街つて、聴いたやうなことを云ふ。雅夫は白々しい虚言をと思ふたけれど、流石にそれも



可愛かつた。

「何故ですか。」

「彼處の大廣間からあの横笛の音が洩れるでせう。それが恠う森然とした芝生に響いた、何だか平家にある榮華の果といふやうな事が思ひ出されて来るのよ。」

小夜子は其頃雅夫から世に持て囃された詩集などを借りて見て居たので、もう恠ういふ思想にも觸れて居た。

「貴女も來年で學校は卒業ですね。」

「爾うよ」小夜子は力なく應へたが「雅夫様どうして此間の事は、矢張、何處までも文學でも通しなされるの、眩しそうに俯向いて居る雅夫の顔を覗き込むやうにして見る、其瞳には人を魅するやうな色が浮んで居た。」

「私には世間の人のやうに、華美な生活は到底出来ません、また爲る氣もありません。」

「貴郎は貧乏人に同情して居るのね」此頃雅夫の思想には未だ民主主義といふやうな纏つた考は無かつたけれども、拜金宗の誤つた感化をうけた、伯父の生活と自分の性格との間に行はれたはげしい暗闘は、やがて此青年の頭腦に爾ういふ興味を吹き込むばかりになつて居た。

「何も私が好んで貧乏を擇ぶ譯ではありませんけれども、私は自分の天性を詐る事は出来ないので。」と雅夫は辛と言ひ切る。

「爾うでしやう、また其方が貴郎の爲かも知れないは、けどもね家では貴郎が文學をやると云ひ切ると、必然變に思つてよ。」

「私だつて夫が辛いから煩悶して居るんぢやありませんか。」

「實業を遣つて居ながら文學を樂むといふことは出来ないので。」



「私の文學は娛樂にする文學ぢやあ無いのです。」鋭い雅夫の頭腦には此頃からして最早人生といふやうなものに對する深い考へも萌して居たし、慙うした幸福な家庭に育ちながら社會組織の矛盾といふやうな事にも淺からぬ不平の情を抱いて居た。

「仕方が無いのね」と云ふて小夜子は術なさそうに高い生籬の方を向いたまゝ忙然と立つて居る。

春の日は靜かに楓樹の植込から射し込んで居る。生籬の外には一としきり俥の輪の砂をかむ音がして居たが、夫が止むと四邊はまた寂然として、小鳥の囁きが耳近く洩れて来る、小石川も此邊はもう野に近い。

雅夫は恍惚として、小夜子の美しい横顔を眺めた。幽かにかよふ女の呼吸を窺つて居ると、其優しい心臓の鼓動が何時の間にか自分の胸に應へるやうな氣がして、不安の感覺が全身に泌み渡る。慙んな美しいもの

を、あたらし虚偽の世に投げ出して、豚のやうな人達の玩弄にして仕舞ふのかと思ふと急に情なくなつた、いつそ一思ひに殺してやらうかといふやうな氣もして来る。

慙んな天使のやうな顔をして居ながらも、虚偽の生活が其心根までも泌み込むで、泣いても笑つても、自分達のものには成らないのかと思ふと、不意に武者振り付いてあの髪を切り落してやらうかとも思つた。

「嫌だはー雅夫様——私の顔に何か書いてあるの。」

「あります。」

「何んな事が……」

「このよはあまり、實にすぎて、

あたらし我身はゆめばかり、」

雅夫は其まゝ眼を膝の上の詩集に落して其一節を口ずさむと深く



吐息を漏した。

「馬鹿にして居るは……何でも好い事よ、私達のやうな者には到底貴郎の云ふ事なんか分らないんだから。」

「彼方で伯母様が呼んで居ますよ。」雅夫は小夜子と憚うして居るのが不安で堪らぬ。何時までも話して居るのは嬉しいけれど、伯父夫婦の態度といひ日常の生活と云ひどうしても其處にお互の間にうちとけて親まれぬ深い谷があるので、雅夫は小夜子に對しても、たとへば主人の娘を見るやうな氣がして、思ひ切つた事も言はれなかつた。

「爾う邪魔にするなら最早行つてよ……其代り恨むは—」

今雅夫の眼には其時、情を銜ふた小夜子の瞳の色が瞭然と映つて來た。何時の間にか銀茶色の雲が日を蔽ふて涼しい風が、虞美人草の花を吹いて居る。いさ黒い胡蝶が椅子の上をよはくと飛んで行つた。雅夫は

過去の戀の夢から醒めて蝶の行方を忙然見送つて居ると、花壇と後庭の塀の木戸が開いて不似合な夏帽子を被つた赭顔の庭男が箒を持つて口の中へ何か云ひながら出て來た。年齢はもう六十に近いけれども、頑丈なもので、若い時に芝、田町の松平隠岐守の邸に中間奉公をして居たといふのが自慢で、茶を飲むと直ぐ其話をする、蔭では朋輩が皆「隠岐守」と呼んで居る。

「やあ雅夫様でしたか！」と、隠岐守は笑ひながら傍へ寄つて來た。

「變つた事は無いかね。」雅夫は義理一片の口をきく、

「有りませぬね、唯暑いばかりで……お嬢様の縁談は聞いたらうね」

「知らないよ。」平氣で答へたやうなものと酷く胸をうたれた。「何、何處へお嫁に行くのだらう。」

隠岐守は雅夫と並んで椅子に腰を下したが、篝火を磨つて煙草を吸い



黙けた。老爺何處までも氣が長い。

「何とか云つたッけいな……そうら王子の、好く園遊會をやる……」

「柿澤か？」

「そう、柿澤様の親類で何でも偉い軍人様だそうだ。」

「家は何處だらう……」

「未だ聞きませんがね。何でもお婿様が何時かの園遊會にお嬢様を見染めたといふ事ですよ。其柿澤様がお世話人といふので旦那も夫人も大變乗氣な譯さ……」

「宛然、昔の小説のやうな話だね、そりやあ何にしても結好だ。」

其處へ先刻の小間使が急歩に飛んで来て、「あの最早お客様がお歸りになりましたから……」と云ふ、雅夫が黙つて諾くと、小間使は庭下駄を重そうに引き摺つて母家の方へ歸つて行つた。

(十一)

茶の間の椽から上つて、新三郎の居間へ来て見ると、新三郎はもう何時の間にか洋服に着換へて、絹布の産蒲團を二枚重ねた上へ宛扇をうに座つて居た。

新三郎は今茲五十五歳、此社會の人に好く見る麥酒肥といふたやうな如何にも資本家らしい態度は少しもない。軀軀は瘦型で、何處にか病身らしく弱々しい處がある。光澤のない顔は淺黒く日に焦けて、若い時からの悪戦苦闘を名残なく語り盡して居る。太い眉根に深い皺がよつて窪んだ眼が異様に光るので會社の給仕等は、新三郎の事を陰で「黒鬼」と呼んで酷く怖がつて居る。鼻が西洋人のやうに高いのと、口が引締つて居るので、怖い容貌の中にも何處か上品な處が見える。



雅夫が敷居の外に畏まつてうやうやしく一禮するのを下眼に見て、新三郎は一寸時計の蓋をあけて見たが、灰吹を取つて痰を吐くと應揚に語り出した。

「今高から聞くとお前は學校を落第したそうだが、何うも困るじやあ  
無いか……」澤田君は一種の雄辯家だと會て實業雜誌の記者が評したそ  
うだが、西洋文を翻譯して來るやうな此人の話振には何處かに重々しい  
處があつて、若い人達を感心させる力を持つて居る。

雅夫は痰を吐く伯父の顔を凝と見て居たが、あの弱々しい軀軀から、  
どうして恁んな恐ろしい聲が出るのかと思ふた。

「お前は近頃大分世間にも知られて來たと云ふ事だし、學校も出來る  
といふから、陰ながら望を囑して居たが、爾う云ふ事では乃公も失望し  
た。

一體人間といふものは自分の力を信ずるのは好いけれども、自分の力  
を信ずるのあまり事業を輕蔑するやうな事があつてはいかん。」

「真く私が不勉強でしたから……」と雅夫は新三郎の意見の思ひの  
外穩やかなのに力揚げがした。

「お前は今故郷から幾何學費を貰つて居るか知らんけれども、乃公が  
東京へ出た時には一ヶ月二圓の小使で紙も買へば、蕎麥も食ふといふ狀  
態であつた。

其二圓も死ぬやうな事を云ふて遣つて辛と送つて貰つたものだ。」

そろ／＼伯父の本音が出て來た。雅夫の顔は青褪めて、唇は微かに顫  
えて居た。伯父が學費の話をする度に雅夫の親から補助して貰つた二圓  
の學費を如何にも馬鹿にしたやうな口調で話すが雅夫には心外で堪ら  
なかつた。



『それから芝の新築座で勉強した時でも非常な苦心をしてやつたものだ。

第一其頃は書物が非常に不自由であつた、早い話が洋書を讀むにしても辭書が思ふやうに手に入らなかつた。仕方がないので一冊の辭書を原にして互にそれを寫して用を足した、處があつた辭書を寫すといふのが容易の事でない。

其事を思ふと今の書生は實に幸福なものだ、僅かな金で書籍はいくらも買はれる、學校は至る所に在る、夫でどうかといふと我々時代の書生がやつた程の勉強はして居ない、學校を卒業しても口端ばかり達者で仕事を遣らすれば何一つ出來ない。日本の將來も實に思ひ遣られる譯ぢやあ無いか。『新三郎の眼から見ると今の青年がいかに胸甲斐なく見へて仕方がないのだ。

雅夫は只「はい……」といふたまゝ恐れ入つて聽いて居るけれども、心の中では伯父のいふ事を些とも感心して居ない。伯父は時代の變遷といふ事を知らない。此生存競争の激しくなつた現代と、維新の動亂時代とを一處にして居る。苦學をして偉くならうといふやうな事はもう動亂時代の夢だ。けれども雅夫はいまそれを云ふて伯父と争ふ積は無い。夫は伯父が怖いのもなければ、また伯父の機嫌を取らうといふのでも無い。伯父程の人物でも、自然の力には抵抗する事が出來なくて、時代と共に亡び行くのかと思ふと何だか情なくなつて、何んな事を云はれても只はいくと聽いて居る氣になつて仕舞ふのである。

若い人達の群からは「會話の王」とまで呼ばれて居る雅夫も、伯父の前へ出ては宛然としたやうである。

雅夫は此頃伯父の家へ來る度に思ふた。英吉利の記者の書いたものな



どを見ると社會の尤も健全な分子は中等階級であるといふやうな事が書いてある。牛込の粟野の家庭などは所謂健全な中等階級といふものだらう。伯父の家庭も資産はあるけれども、マア中等階級といふべきである。けれども實質に於ては上等階級がもつて居る全ての弱點と短處とを併せて居る。伯父の家族は上等社會の生活を擬て居るのだ。爾うぢやあ無い今日の社會の狀態が昔の中等階級を漸次に亡ぼして行くのだ。

三井、三菱といふやうな大資本家は今の世の將軍家だ。伯父は其將軍家の旗本である。粟野の家などは今では此將軍家と何の關係もないやうであるけれども、此狀態が益々進んで行くにつれて學者も將軍家の徳を稱へなければ暮して行かなくなり成つて来る。雅夫は此土用の真中に絹布の座蒲團を重ねて座つて居る伯父の顔をつつく、眺めて居たが、これは何うしても殿様に相違ないと思つた。

『乃公はち前がどうしても文學をやると云ひ張つた時でも、自分の天性好きな事だから夫も好からうと思つて、内々ち前の成功を祈つて居た。

若しち前が彼の學校を出て、更に洋行でもしやうといふ意志があるならば、乃公も相應の補助はして遣る積りで居た。

何にしる最早少し勉強して、來年は立派な成績で卒業して呉なくちやあ困る。』

雅夫は只もう恐入つた。新三郎は今日出勤しがけに内務省の或る官吏と會見の約束があるといふので、女中を呼んで其處へ電話を掛けることを命じた。

森處では女中が車夫を呼ぶ聲がする。

雅夫は新三郎の出勤を送つて玄關へ出た、高子夫人も來た。女中も三



人來た、一番古参なのが新三郎の夏外套と、バナマ帽を持って隨いて來た。式臺が狭いので小間使は庭下駄を穿いて石の上に下りて居る。踏石の上には塗靴が揃へてある。新三郎は古参の女中に夏外套を着せて貰ふと應揚に帽子を受取つて靴を穿いた。車夫は膝掛を腕にかけて町噺に主人を迎へたが新三郎は俥に乗らず、「生籬を見て行く……」と口の中ですも大義そうに云ふて、玄關先の敷石を靜かに踏み鳴らして出て行つた。いま植木屋が來て邸宅の生籬を刈込んで居る、新三郎はそれを見て行かうと云ふのである。

送つて出た家族は主人の後姿に一禮した。雅夫もそれに連れて頭を下げた。けれども新三郎の弱々しい體態と元氣の無い歩き振りとを見送つて、之が生存競争の勝利者かと思つた。

何時も送つて來る小夜子が今日はどうしたのか見えない、伯母は遊ん

で行けといふて勸めて呉れたけれども、小夜子の結婚の事を聞き込んでからはもう澤田の家と全然縁の無い人のやうで、一分も長居としては濟まないやうな氣がした。雅夫は伯父を見送ると直ぐ道げるやうにして澤田家を辭した。

雅夫は澤田家を出るとまた急に牛込の安城を助ねて見る氣になつた。伯父の邸宅の生籬に沿ふて大塚の田圃へ下りる。雅夫は汗ばんで淡暗い様な路を急いだ、氷川の森の青葉に激しい夏の日がキラ／＼と射す、森の間から琉璃色をした空が深い淵のやうに見える。

昨夜は落第ぐらゐの事で何故あんなに煩悶したのだらう。雅夫はいつか恠んな氣がして來た。

急に昨夜路子に宛て、出した感情高い手紙の事を思ひ出した。「何うしてあんな激しい事を書いて遣る氣になつたらう、けれども世界で自分を



了解して呉れる女は路子ひとりだ」と思ふと急に路子の返事が氣づかしく成つて来た。

「小夜子の今日の素振りは何にも自分を蔑んだ仕打だ、けれども自分はその思ひが到底小夜子に届かないといふ事を無念に思つて路子に戀を云ひ遣つたのではない、路子に手紙を送つたのは其以前の事ではないか。

自分は決して罪を犯したのではない。」雅夫は慍う思つて自分で自分を辯護して見た。

(十二)

夕日は観音山の疎な松林に沈んで長谷の原は一面の鏡に包まれた。大島から稻村ヶ崎の空にかけて漫つた葡萄色の雲が、赫焉と猩々緋に變ると、坂の下から遠く材木座の海岸にかけて、曳上げられて居る船も、轉つて居る魚籠も、打あげられた藻草も皆夕照の色に映えて、濱を通る漁夫の顔が宛然猿のやうに輝いて居る。

「君見給へ、慍うして眞赤な夕日の色を凝と見詰めて、急に眼を閉ぢると、暗の中へ暫く小さい夕日の象が現はれて居るぢやあ無いか……」

二人の青年は閻魔川の岸に沿ふた小高い砂山の上に偃つて居る。四邊には淺茅が一面に伸びて其間に晝顔の花が咲いて居る。

「ゲエテがヘルマンの戀を叙した處に爾う云ふ句があつたね。」英二は



云ふ。

「僕は此事を一つの心理上の現象として科學者から聞いた。……けれども僕は思ふね、人の理想とか觀念とかいふものは今吾人が見る口の心象のやうなものだ、吾人は到底此理想とか觀念とかいふもの、世界に生きる事は出来ない。」雅夫は云つた。

「爾うだ、All idea is but smoke and vapor だ……」

「人生は瞬間だね」

兩人の熱した心臓の鼓動がトツ／＼と鳴る間に、天も地も見／＼灰色に變つて来た。海濱院の松林には長谷の町から揚る煙が長く裾を曳いて居る。海も、島も紫紺に暮れて汀に碎ける白波がたゞ一線に際立つて見える。

「だから人はもう刻、一刻に生きて居ればそれで好いのだ。『曉鐘』は

何處までも有りのまゝの人生を、虚無の立場から見に行かうぢやあ無いか……」

「大に好いね、それには現代の教會と教育とを攻撃してやる必要があるぢやあ無いか。人生の真相を偽つて、無邪氣な少年の頭腦に殆ど拭ふ事の出来ない虚偽を教へて行くものは現代の教育と、基督教會だ。」

「大に落第の復讐を試みやうといふのだね。」

「また君の皮肉か、僕は眞面目に雜誌の方針を相談して居るぢやあ無いか——此國の教育があまりに偏狹に失して居る事は、深く學校といふものに執着を絶つた君に對して僕が説明する限りでは無いけれども、此頃の基督教會はどうだ。歐洲社會の尤も恐なる習慣や、因襲に征服されて仕舞つた見苦しい教理を其儘に輸入して来て、頻りに偽善の聲を揚げて居るぢやあ無いか。本郷教會の一派などは盛に攻撃して遣るが好いと



思ふね。」

「基督なども一つの偉大なる精神的虚無黨だね。けれども教會に至つてはもう社會の思なる因襲の結晶に過ぎないのさ。見給へ、十九世紀以來の思想家として世界に名を知られた人で教會の仇敵でない者は一人も居なかつたぢやあ無いか。」

「歐洲の教會と、日本の教育とは餘程似寄つた點があるね、ソラの「真理」を讀んで見ると羅馬教の小學校が少年に虚偽を教へる事が手に取るやうに書いてあるが日本の教育と同じやうなものだ。」

濱にはもう人影が絶えて仕舞つた。日が暮れると華美な中形の浴衣、燃え立つやうな若い帶地、美しい女の幾組もが、暫く磯に群て來たが、それも暫くで、霧の深くなる頃は、云ひ合せたやうに消えて仕舞つた。陸が静かになつて來るに連れて、潮の音が宛然雨のやうに聴えて來る。

見ると光明寺あたりの別荘から洩れる灯の影が、あどやかに干潟に落ちて居る。

「もう誰も居なくなつたよ、磯を歩いて見やうぢやあ無いか、」雅夫は先に立つて低い砂山を下りた。

閻魔川の獨木橋を渡つて兩人は汀を材木座の方に歩いた。宵暗の空に磯の香が高い、由井ヶ濱は、稻村ヶ崎と小坪の崎を兩端として弓形に海曲して居る、海濱院の松林は其灣曲の最も深い所である。

潮流が此松林にあたるので、波濤は此處まで來ると急に險しくなる、風の和いだ夜は不斷に霧が立つ。

「女ぢやあ無いか……」

「西洋人だ。」只見るその霧の中に、黒い二個の影が白い水を抽いて濺騰と現はれた。嗚々として語る優しい聲が近づいて來たが、やがて若い



西洋の處女が二人、腕を組んで傍を通り過ぎた。年長なのは十七八歳でもあらうか、英二よりも、雅夫よりもズツと丈が高かつた。

兩人は云ひ合せたやうに處女の後姿を振り向いて見た。

「西洋の處女は好いね、繪のやうな逍遙ぢやあ無いか……夜と暗との前に何等の恐ろしい連想をも有たない彼女は實に幸福だよ。」雅夫はもう一度後を見た、マガレットを結へたリボンが白く暗の中に見えて滑らかな聲が波瀾の間に聞えて来る。

「路子が待つて居やあしないか。」英二は急に思ひ出したやうに云ふた。

「僕が「スプリング、フラッド」を借して遣つたので此頃は大騒ぎをして讀んで居るやうだ。」雅夫は英二が路子のことを云ひ出したので、之を機會に自分との關係をうちあげて置いた方が好からうと思つて、此間から

躊躇つて居た心が此時急に動いて來た。

林町の伯父を訪ねて落第のことを話した翌日の夜、雅夫は路子からの返事を受取つた。手紙には雅夫が待ちまうけた通り、喜んで雅夫の戀を容れるといふ事が如何にも語巧に云ひ廻してあつた。爾うして熱心に落第のことが慰めてあつた。區々たる學校の成績の如きは、決して貴郎の心を煩はすべき事でない、貴郎の立場は他の學生とは違つて居るでは無いかといふ事が長々と認めてあつた。けれども雅夫の胸には悠らう一通の理窟では到底慰められる事の出来ない、深い感情のもつれが潜んで居たので、路子の心を籠めた慰藉の手紙も雅夫にとつては、先輩から叱られても居るやうに思はれて、少しも嬉しくはなかつた。

けれども路子が自分の戀を容れて呉れた事は何處までも満足であつた。手紙の終に路子は此戀を母が許して呉れるだらうかと云ふ事を非常



に氣づかつて居た。雅夫は互の戀は古き社會の習慣によつて容易く破壊されるやうなもので有つてはならぬと云ふことを力づよく書き送つた。

雅夫が初めて路子と相知つてから互に手紙の往復をして居る事は英二も雅夫から聞いて好く知つて居た。雅夫は好く笑ひながら路子の手紙を英二に見せて成島校長の犠牲論を冷笑して見た事などもあつた。

「僕は今夜君に話して置き度い事があるんだがね。」

「何んな事を……」

「實は路子と僕との事なんだ。……此頃になつて新しい關係が生れて

來たのだ。」

「そりやあ意外だ。」

「僕は彼女と結婚を約したんだが、何うだらう許されるだらうか。」

「許されるとは……路子はどうしたんだ。」

「承知したのだ。」

「爾んなら最早問題は無いぢやあないか。サーカムスタンスなどいふ事は、何も吾人が顧る必要の無い事さ。」

兩人は何時の間にか滑川の口に支へられて居た。やがて川に沿ふて八幡の並木の方に足を向けると、波濤の音が急に遠退いたやうな氣がする。「此處で悠然聽かうぢやあ無いか。と英二は齒のしめやかな砂地に腰を下した。

海はもう銀灰色に松の並木から見えるやうになつた。腰を下して兩人とも暫く無言で居ると、こんどは齒の聲が頻りに耳に付く。

「僕を最も好く了解して居て呉れる君は、路子との關係に就ても大に同情して呉れる事が出来るだらうと思ふね。」



僕は憐れ見えても實際、生活といふ事に對しては一種の深い恐怖を抱いて居るよ。何だか憐れ自分の生涯が悲惨と伴ふ運命を持つて居るやうな気がして一度路子のやうな女を失つたならば、行先長い旅の空にもう再び僕の路連となつて呉れるものは無いやうな気がして仕方が無いのだ。

路子はとにかく僕の生活に満足して呉れる事が出来る女と思ふが何うだらう。」

「お互にいろ／＼批評もするがマア兎に角分つた女だね。確に新しい婦人の輪廓が現はれて居る。……僕は始から君が彼の女に満足するだらうとは思つて居なかつたよ。」

「何故……」思ひあたる所が有るだけに雅夫の聲は激しく響いた。

「彼の女には街情の調子が少しも無い。吾人が判断の上では自分の妻

として何處までも缺點の無い女だと思つても、兩性の間には何處かに温かい感應が無くちやあ駄目だよ。

僕は路子の清酒とした容貌と、智慧の溢れるやうな唇とを見る毎に、親しい感情は起るけれども、まだ兩性の間に生ずる或る力を感したことは無い。爾うかと云ふて路子は誰が見ても十人並以上の美人には相違ない。

吾人があゝ云ふ女性に戀することが出来ないといふのは、吾人の感情が未だ古い因襲に囚はれて居る證據だね。」

「僕にだつて其感はあるよ。けれども吾人にはもう昔の青年のやうな情緒一片の若々しい戀はどうしても出来ない。寂しい事だが僕は妻として彼女を撰んだのだ。」

と雅夫は何氣なく答へたが、今更のやうに粟野の頭腦の鋭利い事を感



じた。何う考へて見ても明瞭と思ひ浮べる事の出来なかつた、路子に對する不満の情を、英二が自分に代つて言ひ現はして呉れたやうな氣がした。

「それで好いとも、戀愛とか家庭とかいふものは寧ろ個性の桎梏だ、吾人はそれ以上のものに向つて進まなければならぬ、君の妻として路子は何處へ出しても愧しい女ぢやあ無い。」

「君の友情は眞實に感謝するよ。」

「僕もいよくとなれば大に勢拔するさ。」

蘆の葉にサラ／＼と風が鳴つた。小坪の山を離れた宵の明星がドンヨリと濁つた川に映つて、狼の眸のやうに光つて居る。

潮がさして來た。そこには藻屑が靜かに川上の方へ流れて居た。

「町を廻つて歸らう……路々話さうぢやあないか。」英二は憊う云ふて

立ち上つた。

兩人は無言で並木を出ると芋薯の畑を通つて街道の方に歩をうつした、露がつめたく素足を濡らした、白旗山が巨人のやうに鼻頭に見える。

「西村では非常に路子に結婚を勧めて居るといふ事だね。」

「うむ……其事は何時か彼女が家の兄に話して居たやうだ。」

「何か危んで居るんぢやあ無いか。」

「いや、彼家では始終若い男が出入して居るので手紙の往復ぐらゐは

何とも思つてやしない。」

「何故だらう……學校も未だ途中なのに。」

「只ね、長兄の嫁を貰はうと云ふので自然妹の結婚を急いで居るやうな譯さ。」

話はまた途切れた。



兩人は何時か電氣の明い長谷の町へ出た、其處には有るだけの品物を綺麗に店先に飾り付けた小い雜貨店がゴタ／＼と軒を並べて居る。物の煮える香が、磯の香と混つて頻りに人の鼻を撲つ、別に貝細工屋もある、黄昏磯に居た女の群は今此處に集まつて來て居る。

雅夫は女の傍を通つて白粉の香を嗅いだ爾うして其肉付の好い横顔を覗いた、爾うして路子と何方が美人だらうと思つて見た。

(十三)

大佛の辻で粟野は思はず小學校時代の舊友に邂逅ツた。有磯とかいふて麴町に住んで居る市會議員の倅であつた。牛乳屋の横町に滞在して居るから、一寸戻つて遊んで行けと云ふて頻に英二を促した。

雅夫は英二から形式ばかりの紹介をされた。「御名前は承知して居ます。」と有磯は隙さず云ふて、辻村にも是非同伴に立寄れといふて勧めた。有磯の華奢に作つた風姿を見ると、雅夫は何だか精神的にも、肉體的にも自分と没交渉な生物を見るやうで、何うしても誘はれる氣にならなかつた。

英二も「今日は伴があるから」といふて一途に辭退したけれど、有磯はなかく放さなかつた。結局、粟野は辻村と別れて舊友の宿を訪ねる



事になつた。

辻村はひとり栗野の宿に歸つた。

栗野の家族は坂の下の星が井戸に近い或る仕事師の家——貸別荘——

を借りて居た。雅夫は「曉鐘」の打合せやら、學校の成績の事やらで英

二が勧める儘に二三日前から始めて鎌倉へ来たが、此處で思はず路子と落ち

會ふ事になつた。

「先生はどうしましたか。」雅夫は田舎風の土間を通つて坪庭の方に向

いた座敷の縁端に来て見ると、路子がひとり机に凭れて頻りに「スプ

ング、フラッド」を讀んで居た。

「あら、英様は……。」といふて反對に問ひ返す。

「今途中で別れました。昔の朋友だつて長谷に来て居る人に誘はれた

んです。」

「ぢやあ長谷の方から入らしたんですね。……先生に行合はなかつ

て……他些と先刻、町を散歩して來るつて御出なすつた計りですよ。」

と云ひかけて立ち上つたが、臺處から雑巾を持つて來た。「好けない坊

ちゃんでは、恁んな足をしてさ……。」と柔い手で塵埃だらけになつた

雅夫の足を拭いて遣る。

岐阜提灯の影に洒然と化粧をした路子の顔が何時になく美しく映え

た。雅夫は久しぶり初めて路子に會つた晩のやうな氣がした。香水が

鼻について妙に胸がわなゝいて來た。

雅夫は兩足を拭かせながら何時か路子の肩に手をかけて居た。

「小説はどの位讀めましたか。」

「未だやつと五十頁ばかりの處よ。」

「あの頃の露西亞の處女には實際あのヒロインのやうなのが多かつた



のです、ユクエンツシユな處は爾うでも無いが、確乎した處は路様に好く似て居るよ。』

『甘く云つて居るわね』と静と云ふたが眉にかゝつた雅夫の手は、何時の間にか深く柔かい處女の胸の上に垂れて居た。

路子は胸の上に垂れた雅夫の手を自分の手で軽く押しつけた。綿のやうな處女の胸から幽かな心臓の鼓動が男の手に傳はつた。

『甘く云つて居るぢやありません、貴女の胸にも、やがてあゝいふ立派な決心を要する時が来る事を覺悟でせうね。』

昏

『大丈夫よ……』

庭には黒紅色のカクタスが二三輪咲きかけて居る、建仁寺垣を越して涼しい海の風が不斷に吹いて来る、兩人は暫く無言の儘で庭を見つめて居た。

蟋蟀が鳴く……

垣根の外で誠一夫婦と下女の聲がした。

『あら、最早お歸りなすつてよ。』と路子は立ち上つた。

誠一夫婦は下女に梨子を持たせて歸つて來た。栗野夫人は今茲二十六歳、光澤の好い、面長の顔で、愛くるしい口許に深い印象のある惻愴をうな女である。

夫人はナイフを取り出して梨子を剝いて呉れる、路子もそれを手傳つた。

昏

『學校はどうしますか。』と誠一は親切に心配して呉れる。

『實は一時廢めて仕舞はうと決心したのですが。』

『廢めたつて君の事だから立派に遣つては行けるでしやうけれど、最早一年ばかりの處で過去の努力を無意味にして仕舞ふこともないです



ね。』

『眞實に爾うで御座いますわ。』

と、路子は梨子を剥きながら口を入れた。路子は雅夫が學校を廢めるといふ事にひどく反對して居た。

『何うも故郷の親父が學校をやめるなど、云ふ事を非常に苦にするもんですから。』

『それやあ無理もないですよ……英二などもあゝして居た處で好い事も無いんですから。』

『最早一年辛棒してやりませう。』

雅夫は粟野夫婦の温い心をしみじみと感じた。恚うして團練のうちに日を送つて見ると、落第ぐらゐのことで何故あんなに泣いたり、恨んだりしたのだらうといふやうな氣がして來て、自分の前途には矢張美しい

光明がきらめいて居るやうに思はれた。

其内に英二も歸つて來た。若々しい女の聲と活々とした男の聲とがうち交つて小夜更けるまで垣の外に漏れた。英二は今日會つた有磯に新婚の妻を見せ付けられたことを面白く話した。それから其妻の批評が始まつて、特意の皮肉が口を衝いて出た。

誠一のやうな温厚な人の弟に、どうして恚んな鋭い人が生れたのかと雅夫は思つた。

けれども悪口は別として有磯の妻君は非常な美人であるといふ事であつた。

翌日、雅夫は鎌倉を辭した。別離に臨んで誠一は親切に來學期はシツカリ勉強せよといふて呉れたが、門口を出る時に「涼しくなつたら又研究會を開きませう」といふた。汗の苦しい午前十時の日に照り付けられ



て、路子と英二とは停車場まで送つて来て呉れた。

「僕は若しかすると郊外へ引越すかも知れないよ。」

「何處へ……」

「大崎の田圃さ。」

「學校は何うなさるの。」路子はともすると學校の事を氣づかふ、雅夫は私に心ちかしく思つた。

「汽車で通ひますよ。」

「平民的とは云へないね。」と英二がいふた。

「あんまりハイカラだわ。」

セルの單衣に、白い絹張の洋傘をさした若い處女を中に挟んで洗ひさらした白地の浴衣に煤ばんだ帽子を被つた二人の青年は、少からず群衆の眼を惹いた。

「ぢやあ早く歸つて來給へ、編輯の都合もあるから……」

「僕も最早鎌倉は飽いたよ、直ぐ歸る、活版屋の方はよろしく頼む。」

雅夫が横須賀から來た列車に乗り込むと、英二と路子とは送つてプラットホームに立つた。

「君の郊外生活は羨しいな。」

「朝夕、散歩が出来るね、静かな處から大に都會の惡魔に戦を挑まうよ。」

汽笛が鳴つた。列車は靜かに動き出した。雅夫の眼にはプラットホームに立つふたりの肩越しになつかしい稻村が崎と長谷の松林とがグルグルと廻つて行くのが映つた。

「左様なら!!!」と兩方が殆ど一齊に叫んだ。雅夫の眼には希望の光が輝いて居た。



新しい秋と共に雑誌『曉鐘』は發刊された。先づ巻頭の宣言が非常に讀者の眼を惹いて世間の批評は區々であつた。或るものは文藝上の新運動として之を迎へた。或るものは例の『所謂』社會主義者の惡戯として之を貶した。

初號の内容は組織的ではなかつたけれども、其中に自ら思想の統一があつた。クローボトキン、トルストイ、ツルゲチーフの名は辻村によつてモーパーツァンの名は安城によつて、ハツプトマンの名は粟野によつて到る處に繰り返された。爾うして基督教會——殊に其頃大日本帝國といふ民衆の感情に投じて巧みに帝國主義を讚美した本郷教會に對しては、随分はげしい毒矢が放たれた、これは主に辻村と山内秋太郎といふ社會主

義者の筆になつたものである。『曉鐘』はとにかく世間と政府との注意を惹いた。初號は直ぐ再版になつた。

『曉鐘』が出版界の評判になつて居るのを冷やかに見流して雅夫は居る南郊大崎村の林の中に遷した。雅夫の新居は冠門に「大崎養鶏園」といふ陶器の表札の懸つた新しい貸間であつた。澤田家の出入の青物屋の夫婦が何うしたものか少年の時から雅夫を非常に可愛がつて呉れた。雅夫が伯父の家を出る時もうろく世話をして呉れたが、大崎の養鶏園といふのは此青物屋の親類で、鶏卵の取引先であつた。青物屋は澤田家へ秘密で雅夫に今度の貸間を世話をして呉れたのである。

去年の春、『新佛教徒』と謂ふ若い宗教家の群が妙華園で開いた園遊會に招かれた時、雅夫は青物屋に頼まれて、未だ新築間もない養鶏園に立寄つた事がある。十年近く塵埃つばい塙末の空氣の中に暮して來た雅



夫の眼には、此處の椽端から居ながらにして見る野のけしきが云ひ知れず嬉しかつた。

雅夫は思ふた。何うかして一度此静かな武蔵の平原に居を卜して見たいたとへば日が暮れて、あの桐が谷の岡に續く菜の花に黄昏の雲が残る頃、心ゆくまでに此邊の野に立ち蒞して見たい。自分の家は直ぐ眼の前の森の中に在るといふ沈著を心の中に持つて心ゆくまでに此邊の野を彷徨て見たい。彼の岡を越え、森を越え、野を過ぎて、名も知らぬ武蔵の野の村を何處までも散歩して見たい。日が暮れて歸つて來ると森の中の自分の家に灯の影が見える、何んなに嬉しいだらう、雅夫はしみじみ思つた。歸つて來て雅夫は青物屋の夫婦に此話をした事がある。

雅夫が鎌倉へ行く前、鶏聲が窪の湯に行つての歸途、梨子を買ふ爲に青物屋を訪ねた事がある。其時青物屋が雅夫に大崎の鶏屋で同居人がほ

しい、主人が家をあけると後は女ばかりで、森の中の一軒家ではどうも物騒で困るといふて居た事を話した。雅夫の心は動いた。雅夫が鎌倉へ立つ前にはもう大かた相談が纏つて居た。

十月一日、それは雨の冷めたい日であつた。雅夫は朝早く荷物を巢鴨の停車場に送り出して置いて、一寸伯父の家へ挨拶に出掛けた。

澤田夫人の高子は非常に複雑な性格を持つた女であつた。けれども其捉へ難い性格の中で、一番瞭然として誰にも好く分るのが自分の孤獨者といふ寂しみから來た強がり根性であつた。高子はもと水戸藩のさる士族の娘で、宇都宮に産れた。親、同胞は皆死に絶えて仕舞つて、小さい時分から東京に出て苦しい、羞しい經歷の中に處女となつた。新三郎と結婚したのは今からちやうど三十年ばかり前のこと、彼が三菱會社の横濱支店に勤めて居た時知り合になつたので、其頃の事は夫婦の他に誰も



委しく知つて居るものは無い。

自分には一人も血縁といふものが無い、それが新三郎の親族などにして高子の始終氣の引ける事であつた。高子は何うしても新三郎の親族と打ち解けて親しむ事が出来なかつた。また實際新三郎の親族は皆氣むづかしい世間にも親しみの少ない人達ばかりであつた。高子にとつては、未だ便ない二人の子のほかに自分の寂しみを訴へるやうなものは天にも地にも唯の一人も無いのであつた。

女としては切ない、此寂しみを胸にかくしながら高子は一面に非常な我慢を持つて居た。苟にも自分の弱點を人に見られるといふやうな事が酷く嫌ひであつた。されば一方に人の親切を要求することが非常にはげしくて、また一方に弱者となる事が酷く嫌ひな此夫人の御機嫌をとる奉公人の氣苦勞はなか／＼一通ではなかつた。

結局高子は自分の思ふよゝになる、爾うして頼み甲斐のある男が一人欲しかつた。至てに勝氣の、強がり根性の高子は、新三郎といふ只一人の夫を便にして居るばかりではどうも満足が出来なかつた。

雅夫があどけない姿をして初めて澤家田に來た時に、高子は此伶俐をうな少年に對して其處にいろ／＼な空想と希望とを描いて見た。高子は雅夫を酷く可愛がつた。爾うして雅夫と、小夜子とが隔てなく親しみ合ふのを何とも云ひしれぬ、優しい眼に眺めて居た。

ともすると高子は雅夫に對して、三十男にするやうな要求をする事もあつた。爾うかと思へば、未だ肩上げの少年にするやうな遠慮のない舉動を見せる事もあつた。

雅夫は成長するに連れて高子の心情を誰よりも好く知つた。知つたにけに女のする我儘と云ふものがあり／＼と眼に映つて、四十女の厭味が



凜然とする程身にしみる事もあつた。人の弱點に乘じて其人の意を迎へると云ふ事は雅夫にとつて何うしても出来ない事であつた。

其處にも互の感情がもつれた。雅夫が男らしくなるにつれて、高子との間に度々衝突も起つた。けれどもそれは何處かに世の常の悪しみと違ふ處もあつて、二三日するとまたもとの仲に直るのが常であつた。

雅夫が原町に下宿する時に高子は煮え返るやうな感情を抑へて如何にも冷やかに彼の荷物を送り出した。爾うして努めて平氣を装ふて居た。

別れて雅夫は初めて小夜子に對するはげしい戀を意識した。

其日雅夫はもう簡單に挨拶をして歸る積りであつた。それでも小夜子が居たら今日こそ知らぬ顔をして當てつけてやらうといふやうな期待もあつた。

『何うして大崎なんぞへ住む氣になつたんですか、學校も困るぢやあ

有りませんか。』と高子が云ふた。

『目白まで汽車に乗りますから。』

『汽車賃が大變でしやう。』

『下宿料が安くなりますから同じ事せう、それに静かな處ですか。』

『小夜も二三日病氣だと云ふて寢て居ますが……』

『爾うですか。』と、雅夫は態と氣の無い返事をして見せた。

『彼女も今度いよ／＼縁談が纏りましたから、今年の暮か、晩くも來年の春には彼方に嫁ぐ事になるでせう。』

二人は思はず顔を見合せた。高子の口許には冷ややかな笑の色が動いて居た。雅夫は流石に見苦しい負をとつて俯向いて仕舞つた。

『そりやあ結好です……何方へ?』雅夫は殆ど型のやうに尋ねて見



た。

「雅夫様には未だ初めてとしたかね、先方は松本といふて陸軍の方で  
すがね。」

雅夫は何だか高子に腹の底までも見透かされて、ギリ／＼と油を取ら  
れて居るやうな気がしてもう一刻も居たまらなくなつて来た。合つた  
ら思ふ存分軽蔑の眼で冷膽に見流してやらうと思つた小夜子にも向ふか  
ら出し抜いて病氣と云はれて見ると奥へ行つて散々罵つてやり度いやう  
な氣もした。

「何うか伯父様に宜しく。」と、雅夫は其まゝ澤田家を辭した。それで  
も高子は叮嚀に支關まで送つて来て呉れた。

此敷石も最早當分踏みさめかと思ふと、張り切つて居た雅夫の胸も  
急に解けて高子が昔から盡して呉れた親切が身に泌み／＼と思ひ出され

た。住み慣れた駒込の泥濘道をトゴ／＼と異鴨の停車場に向つて歩いた  
時には、何とも云ひしれぬ悲哀が雅夫の胸に溢れて居た。

糠のやうな秋雨は斜に中仙道を吹いて雅夫の衣服はしたゝか濡り勝ち  
であつた。



(十五)

郊外生活につれて、雅夫の生活に目覺しい變化が來た。大崎から目白に、目白から大崎に、朝夕雅夫は汽車で學校へ通つた。四邊の靜かな自然は何時の間にか荒みかけた雅夫の心を和けて、燃えるやうな青年の憤怒、怨恨の情も夢のやうに消え去つた。

泌んみりとした内的生活の小品が濼々として歌のやうに流れた。爾うして之等の小品は、龍川生の名の下に新聞の附録や雑誌の上に掲載されて、同じ時代の若い人達に愛び讀まれた。

雅夫と路子との交情は矢張り手紙の上で繋がれて居た。雅夫は路子の手紙を用もなく煩はしいものゝやうに思ふこともあつた。けれども其儘にして置いては何となく濟まないやうな氣がして返事だけは、晩くもさ

つと認めた。

折ふし路子は大崎を訪ねて。雅夫は路子が來たならばこんどこそは他くまでも感情を恣まゝにしてやらうなどと思ふこともあつた。けれども、路子の顔を見ると何時の間にか理屈に落ちて、どうも物足らぬ別離をして居た。

「私、學校を出たら恁んな處で小兒の世話でもして見たいは。」

「路様が職業に就て僕を助けて呉れると都合が好いだらうな。」

路子を送つて兩人が大崎小學校の前を通つた時、ふと恁んな話の交された事があつた。

「何でもしてよ。」

「停車場の切符賣はどうだらう。」

「馬鹿にして居るわ。」



「結婚々々て一口に云ふけれど、いざと成つたら生活の困難が思ひやられるさ。餘程現實に觸れて居る積でも、未だ吾人の考へには空想が大部分を占めて居るだらうからね。」

路子は此頃どうしたのか兎もすると結婚を急いで居るやうな態度を見せる。雅夫は女といふものは一度でも手を握ると何うして恣んなに結婚を急ぐものだらうと思つた。

大崎の秋は「曉鐘」の連中を日曜ごとに缺かさず引きつけた。粟野を初として、安城、山内等の青年が汽車で南と北から思ひ／＼に集まつて活々とした話聲や、楽しそうな笑聲が夕陽のさす障子の外に洩れて濕やかな秋の空氣に鳴り響いた。

農夫は屢々生籬の外に立つて安城の吟聲に聞き惚れて居た。  
牛肉や菓子品は品川、新宿から来る連中がよく買つて来て呉れた。食つ

ては語り、語つては散歩した。稍苦しい程に膨れた腹を抱えて、連中は桐ヶ谷の岡を上つた。うら枯れた雑木林をぬけて曠い野をあてもなく彷徨ひ歩いた。安城は有名な武蔵野通で、樺林や、尾花の路や、紫苑のすがれたのや、榊の實の落ちたのや黒土の香や、國境の山のけしきを見ると、もう心から堪ないといふやうな嬉しさが見えて居た。山内は連中のうちで少し調子が變つて餘程天才肌の男であつた。エマールソンとかカライルとかいふ人の云ふたやうな誇大な比喻が如何にも上手で「曉鐘」の奇抜な悪口は大かた此人が書いて居た。

近くは大森、目黒、中延あたりから、遠くは洗足池、九品佛、二子あたりまでもうち連れて語り歩いた。歩きながら好く若い女の話が出た。雅夫は女の話の出る度に一種の不快感を感じて。付ては寢食も忘れて語り暮した戀の話が、何故恣んなに面白くなつたのか、自分ながら譯



が分らなかつた。時々路子の顔も思ひ出された。  
 世帯の苦勞を爲つた人妻の、三十歳を過ぎてまだ子の無いといふやうな印象が、路子を想ふ度に雅夫の胸に浮んだ。

(十六)

歳は暮れて、翌年の二月『曉鐘』は早くも廢刊の非運をみる事となつた。

其原因は無論經濟上の困難から起つた事であつたが、それは出版者の都合で、雑誌が賣れなかつたからといふ譯ではなかつた。それに近頃になつて此雑誌に對する政府の迫害がなかく、厳しくなつて來た、といふのは、此時ちやうど足尾銅山の労働者が同盟罷工を起して一夜の中に盡く鑛山を破壊して監督所長を撲ち殺して仕舞つたといふので世間も新聞紙も宛然戦争のやうに騒ぎ立てた事がある。政府は其事のあまりに急なのに驚いて、これは東京の社會主義者と何か秘密の交渉があつたのではなからうかと云ふ嫌疑を起した。或日突然十名ばかりの社會主義者



が家宅搜索を行はれた。『曉鐘』も餘程其筋から睨まれて居たものと見え、辻村雅夫と、山内秋太郎とは矢張り此凌辱を被つた。

翌日の新聞紙には足尾事件の疑獄起るといふやうな刺戟的の文字で、此家宅搜索の事が喧しく書き立てられた。二三の新聞紙——文藝趣味を加味した——には『辻村龍川』といふ名前だけがわざわざ二號活字で植えられて居た。

龍川の名を知つて居る若い人達の心は少からず動いて、昔の小説を見るやうな種々な想像が描き出されたけれども、結局此事件は只空騒ぎに止まつて仕舞つた。

『鐘曉』は三月號から廢刊する事になつた。

雑誌の廢刊と共に、栗野の西比利亞行といふ問題が起つて來た。ちやうど彼方で我が政府から出る資金で或る事業が起ると云ふので、栗野は

或る人から勧められるが儘に、暫く海外に行つて遊んで來やうと云ふのであつた。

栗野の月給は百五拾圓、それが未だ下宿住の連中にとつて如何にも破天荒の事のやうに思はれた。けれども又一方には今迄手を取つて、同じ路を歩いて來たものが一人懸け離れた社會に落ちて行く、殊には西比利亞といふ處が、如何にも墮落と云ふやうな觀念と伴ふて連中のうちには私かに栗野の將來を案じ煩ふものもあつた。

三月二十七日の夜、連中の送別會が京橋瀧山町の或る料理屋で開かれた。朝から氷雨のそぼくと降るいやに陰氣な日であつた。冷めたい黄昏を大崎から汽車で品川に降りて、電車で新橋まで來た雅夫は、傘を斜に淡暗い銀座の裏街を幾つとなく横つた。

雅夫は泌みくくと寂寥をよぼえた。



其處にはうら枯れた柳の枝から、冷めたい雨の雫の滴るのが、軒燈の光にさながら氷柱のやうに映つて居た。狭い間口の格子戸には婿を賣る婦人の、艶しい名前の書きつらねられた提灯が寂しげに照らされて居る。雅夫は恚ういふ婦人と一時でも面白く話して居られる人達をしみじみ羨ましく思ふた。

其夜は別離といふので飲めもしない酒が運ばれた。雅夫もそれに強く刺撃されて何時の間にか先刻の寂寥を忘れて居た。昔い一座は皆眼の格を紅くして、火のやうな氣焔を吐いた。

「まあ一年位は好いが、何時までも居る處ぢやあ無さね。」

「爾うだ、早く歸つて來給へ、僕は栗野君が例の豪傑病に罹らうとは思はないが何しろ空氣が空氣だから……。」

「有りがたう、僕も未だ老い込むには早いからね。」と栗野は四方から

起る連中の送別の辭を一人で受けあぐんで居る。

「それでも栗野君が異郷の地に行つて仕舞ふと、何だか吾人と精神的交渉が遠くなるやうな氣がして、彼方へ遣り度く無いな。」

と辻村は忌憚なく云つた。

「其處が生活の悲哀さ……」酔つては居るが栗野も何となく泌んみりとした。

「辻村君！栗野君の西比利亞行にはまだ他に大なる原因があるのですよ。」と、これは山内が云つた。

「分つた、行きに仕方」のことか」と安城が早く話を受取つた。栗野の失戀した女は此頃夫に隨つて北滿洲に居るといふ事である。彼女の夫は外務省の小官吏であつた。

「爾うか」と、一座が哄然と横手をうつて笑ひ出した。笑聲が未だ鳴



りやまぬ中に安城の吟聲が座の一隅に起つた。

『行きにし方は、いづれぞと

巖に、のぼりて眺めしも、

波路のはては、灰色よ

涙、流れて見えわかず。

せめて感む、すべもやと

歌に、心をかへせしも、

そむきし罪か、詩のかみの

賛げ、ありとも思はれず。

笛の手なにか、さよき音は

安き身にこそ、興を見れ、  
人を、うらみて動ずる身  
たゞ泣かしむる節ばかり

\* \* \* \* \*

戀するひとに 健忘と、

強きころを興へずや。

いまかなしみに、過ぎし日の

快樂おもふにしのびじよ。

不幸なるかな、白き手に



詩の清興をすてしより、  
名譽まれなる、かつらのは  
とはに頭にまことひ得ず。

いままた君をうしなひて  
戀のさかづき くつがへる。  
かくて人の世あひくちの  
氷れる肌にたらんのみ。

手負の鴛の巢にかへり、  
翼をかみて鳴くごとく、  
巖にすがりて 咽びる

男ありとは、知るや、知らずや。」

歌ひやむと安城は例の紅い顔をしてキヨロンと一座を眺めたが、急に皆しらせ渡つて居るので間が悪そうにして居る。暫くは誰も語を繼ぐ者もなかつた。新調の洋服を着た栗野は、さも窮窟さうに跼坐をかいて呢と眼を閉ぢたまゝ頂垂れて居る。美しい聲は未だ一座の人達の耳に残つて、部屋の空気に鳴り響いて居るやうに思はれた。

辻村は立つて欄干に凭つた。雨がさみしく町裏の屋根をうつ、點滴の音の間に銀座を走る電車の鈴が遠く濕ばい空気を透して聞えて来る。ついで鼻の前に西洋料理店の裏座敷が見へて、白熱瓦斯の光に鬮子の卑い女中の顔までが、四邊の暗に映えて、さながら大理石の彫刻の様に見えた。

『巴里コムミュンの物語を見るやうな光景ぢやあ無いか』と山内は何時の間にか雅夫の後に立つて云つた。彼は何處までも革命の夢想者であ



る。

酔は醒めた。

「僕は君と路子との幸福を祈る」と其夜別離に臨んで粟野が云つた。雅夫は此頃路子のことを云はれるのが何だか嫌でならぬ。

雅夫は山の手線の終列車で大崎へ歸つた。冷え切つた自分の部屋に入つて洋燈を照けると、路子の手紙が机の上に置いてある。雅夫は封を切つて見るでも無く、それを抽斗に入れて、忙然考へ込む。

列車の中でもいつそ死んで仕舞はうかと思ふほどに物悲しかつた。今懲うして眠と考へ込むで居ると果しもなく氣が減入つて来て、自分ながら恐ろしい程に胸が塞つて来る。

風が吹いて来た。雨が頻りに窓の戸をうつ、雨と風との間に、裏の鳥小屋で家鴨の鳴く聲がク、とした。

(十七)

路子からの手紙には、母が此頃自分のことを非常に疑ひ出して、貴郎のことを頻りに尋ねるといふこと、貴郎の家宅搜索をされた事が新聞に出てからは、たとへ先生の家へ出入する人で、英二様の親友なりとも、決して女だてらに爾ういふ人と交際などをしてはならぬと厳しく叱り付けられた事などが委しく書いてあつて、其後に、たとへ母が何と云はうとも、自分は何處までも貴郎に随つて、如何なる艱難とも戦ふつもりであるといふ意味が細々と認めてあつた。

雅夫は此手紙を見ると急に路子との結婚がもう到底望の無い事と決つて仕舞つたやうに思はれた。家宅搜索を行はれたり、警察から注意せられたり、政府から嫌忌せられる。それは雅夫にとつても、もとより嬉しい事



では無い。けれども其れは雅夫の悲哀であると共に、また雅夫の誇りでもなくはならぬ。路子の母なる人が自分の警察から注意せらるゝといふことを、世間の人と同じやうに、何か自分が破廉恥の罪を犯した者でもあるかのやうに蔑むといふことが雅夫にとつては云ひしれず心苦しい事であつたと共に、また云ひしれぬ不快であつた。

「自分は何うしても爾う云ふ人の娘と結婚することは出来ない、他のことで不承知を云ふならば兎も角も、自分の生命として居る立場を、羞しい罪囚と同じやうに見るやうな母の子と同接することは出来ない。

路子は何故長い間に、自分の母を感化し得なかつたのであらう、母が何と云ふても自分に随ふとはいふけれども、結婚と云ふものは夫程の矛盾を忍んでも爲なければならぬものだらうか」雅夫は慙う思つた。

雅夫は何ともしれぬ不快の情にとらえられて、寒い冬枯れの野を散歩

て見た。路子と結婚することの出来ないといふ悲哀よりも、自分が社会から捨てられて仕舞つたといふ孤獨の感がさらに強かつた。そうして社会は皆路子の母のやうなものかと思ふと譯もなく泣き度くなつて来た。

路子は次の日曜も、次の日曜も大崎を訪ねなかつた。手紙には、近いうちに行つて委しく話するといふ事があつた。多分母親から、厳しい取締を受けて居ることであらう。去年の夏母の言ひ出して結婚を未だ学校も途中だといふ口實の下に、栗野の先生までも引き出して拒むだ後にとだから母も意地になつて居るのだらうと雅夫は思つた。思つたけれども其れを何うしやうといふ氣も起らなかつた。

三月十八日、雅夫は小夜子から封書を受取つた。全く意外であつた。在来郡は海の風が和かに吹くので、もうそろ／＼春めいて其日は午后から霧色の霧が低く、濡れた水田の上をこめて居た。早く學校を仕舞つて



来た雅夫は、袴のまゝ小夜子の手紙の封を切ると夢中で読み下した。

神經の微動ががすかに薄い紙に傳はつて居た。

春寒さ此頃を如何に御過しなされ候や朝夕の御さすらひ、静かなる野のけしき、日曜ごとに紙上にて愛讀いたし、あけくれ親しく御話らひ申せし林町の事ども思ひめぐらすにつけても、樂しかりし夢のおもひでそゝろに禁じあえず候。

同居遊ばされし頃は、さまざま深く心にもとめ申さず候ひしが、原町の御わかれより、何となく物足らぬ思ひにて、その頃承りし小説の條など思ひ出づるにつれ、云ひ知れぬ寂しさを覺え候。われらにも肉身の兄上あらばなど今にもおもひ出でらるゝ事屢々に候。とらに御聞及びの事と存じ候、私こと既に縁談整ひ、他家に嫁ぎゆく身と定まり候處、舊冬よりの咽喉カタルいまにはかくしからず

只今此地にて療養中に候、静かに身のこしかた、行末の事ども思ひめぐらし候へば、いつぞやの御話にて承りし乙女の身につまざる心地いたし候。女の一生ばかり果敢なきものは世にあるまじと思はれ候。さはれ、今はたゞ静かに運命の路をたどるのほかなしと存候。

原町よりは何故に打絶え給ひしぞ、われら恐にして只うつしよの榮華をのみ夢みるものと御さげすみなされ候ゆへにや、恨めしく存候。今宵は早川の音さみしく障子にうつる墨繪の影わけもなく哀れにも悲しく候。

母は急用にて一昨日山を下り今は女中と二人にて候。死に行くやうなる胸のなやみ、せめてもの御文給はらばとひたすら待ちくらし居候。



三月十五日夜

箱根宮ノ下奈良屋にて

小夜子

辻村兄上様

「何といふ女だらう、昔の小説ぢやあ有るまいし、今時恁んな生ぬるい文句で虚言ばかり並べ立てた處で誰が眞面目に受けて道るものか、何だ今にも他家へ嫁かうと云ふものが……女は肉の團圓ぢやあ無いか。何も恁んなに廻りくどい文句は入らん。彼女は宛然色情狂だ、色情狂なら未だいちらしい處もあるが、彼女は只情を街ふばかりなのだ、爾うしてそれが彼女の母の遺傳だ。」と、雅夫は一と思ひに小夜子の手紙をビリビリと引き裂いて仕舞つた。

障子を開けて椽に出た。椿のしげみから窓がツイと出て、生離の間に潜り込んだ。雅夫は石像のやうに立ちつくして、昵と考へ込むだ、それから暫くするとまた机の前へ座つて昵と考へ込むだ。雅夫が何かはげしく

考へ込む時には何時でも恐ろしい程に暗の座つて仕舞ふのが常である。

彼はやがて筆を執つた。

私には貴女の云ふ事がちつとも分らない、私はこれでも血の通つて居る若い男だ、機会が許せば私は貴女に戀もすべし男だ、けれども御安心なさい、私は到底自分といふものを忘れる事の出来ない男だ、決して人の妻に戀は求め得ない。

十八日午后

雅夫

小夜子様

森を出て四五町、手紙をポストに入れに行つての歸途に、雅夫はふと停車場から来る路子に行き會つた。素顔に血の氣が失せて居る故か黒子が今日は酷く目に立つて見えた。

雅夫は例の横顔を氣にして覗いて居る。



其日兩人の相談といふのは結局、要領を得ずして仕舞つた。二時間ばかりすると路子は時計を出して見て、もう歸らうと云ひ出した。母親の嚴しいのを酷く氣にして居たらしかつた。

森の家を出ると槻の木が垣根のやうに續いて居る、徑の傍の凹地が自然の池になつて、鶏屋の家鴨が兩人の足音を聞くときたましく鳴き出した。一方は目黒の夕日が岡に對して廣い水田である、田の畦にはもう若い春の草が萌え出して居る、南の温かい風か吹いて、森にあたる光線のゆたかな故でもあらう。

『眞實に何うしたら好いでしやう』と、路子は、さも術なごうに云つて、ホツと嘆息を漏した。

『何うも外の事と違つて、僕にも仕方がありませんね、素寒貧の書生だから好けないとか、他に好い家から貴女を所望して來たとか云ふやうな場合ならば兎も角も、貴女の御母様が僕の人格を根底から無視して懸るといふんぢやあ、何うも手の付けやうが無いですね。』

『だつて母は母、私は私ぢやありませんか、それに未だ貴郎との關係を話して見たといふ譯ぢやあ無いんですもの。』

『實際つてもいけないと云ふ人に、結婚しても好いかと云ふのは、仇敵の處へお嫁に遣つて呉れと云ふも同じでしやう。』

『ぢやあ一體貴郎は何うすると云ふのですか。』

『残念ですけれども、兩人は家族制度の犠牲になるより他に道はないですね。』

『別れやうといふのですか。』



「それが貴女にとつて一番幸福な道でせう。」

「些とも幸福な事は有りません。……それに未だ他に方法が無いと云

ふんぢやあ無いんですもの。」路子の聲は頓えて居た。

「何んな……………」

「先生にお頼みして母を説いて貰いても好いぢやあ有りませんか。」

「爾んな事は出来ません」

「何故……………」

「まあ考へて御覧なさい、先生と貴女の家とは親類の關係ぢやあ有り

ませんが、全く他人といふなら兎も角、爾ういふ事をお頼みして先生が

何んなに迷惑するだらうと云ふ事も考へて見なさやあならないでしや

う。」

路子は其まゝ黙つて仕舞つたが、歩が急に遅くなつて来た、感情が餘

程激動して来たらしう。」

霧を透して午後四時の日か淡く目黒川の谷を照した、光線はさながら

朧夜の月のやうである。荷車の砂に轆る音が幽かに聞えて来るほかは鳥

の聲一ツしない。御殿山には小さい工場煙が霞いて、森の色が如何に

も疲れ切つたやうな調子である。

ふと見ると路子はハンカチーフで涙を拭いて居る。雅夫は激しく胸を

躍らした。

「貴方は妾を瞞したんですね。」

「何故……………」

「だつて貴郎は全ての無意味な習慣を破つて進まうつて云つたぢやあ

有りませんか。」

「そりやあ、あんまり理窟に過ぎるでしやう、僕だつて貴女と別れる



事が何んなに嫌か分らないぢや有りませんか、けれども今の處其れより他に仕方が無いでせう、早い話が、今日だつて貴女は御母様の事を氣にして早く歸らうと云つてるやうなものぢや無いですか。』

路子は袖を顔に當て、咽び出した、雅夫も泣き度くなつて來た。けれども何うしても泣けなかつた、泣くより苦しい思を雅夫は感じた。青褪めた頬に傳はる女の涙を見て、雅夫はどうして自分には涙といふものが無いのだらう、若し涙が出たならば、それと一處に此苦しい胸の懊惱も解けて流はてしまふであらうにと思つた。

雅夫は泣いて居る路子が羨ましくなつて來た。

何とも知れぬ不安の波が雅夫の胸に高まつて來た。若し夜でもあつたならば、雅夫は路子を抱いて其熱い涙に接吻したかも知れなかつた。

雅夫は啜り泣く路子を送つて、森の下路を停車場の方に廣い水田の中

に出た。向ふの道を行く牛乳屋が、踏切を越えた處で佇つて二人を昵と見詰めて居た。兩人は急に歩を早めた。

雅夫は恐ろしく感情の高まつた路子をひとり汽車で歸すのが何となく心配で堪らなかつた。それに未だ自分の胸に或る疑塊があつた、それを路子に打ちあけて仕舞はなくしては濟まないやうな氣がして、大崎から膝を並べて新宿まで路子を送つた。

風が出ると雫色の霞は名残なく晴れてまた冬に立ち歸るのかとも思はれるやうな寒さがひしくと身に沁みて來た。汽車の中は二人とも無言で過した、路子は泣き腫した眼を膝に落して始終思ひに耽つて居た。新橋から乗つて來た鐵道廳の役人の群は、新しい洋服の嬉しそうな若い人も生活に疲れ切つたやうな古い人も、皆一樣に視線を兩人の上に集めた。何事か囁いて、爾うしてひそくと笑ふ者もあつた。雅夫は何だか急



に身の破滅を覺えた。

『何にしても暫く御母様に心配をかけ無いやうにね、……また好い機会もあるでしやうから。』

新宿の停車場で別れる時に雅夫が慇懃云々と、路子は黙つて諾いた。夕日は斜に赤い遠方シグナルを照して居る。

雅夫は定期乗車券を持つて居たけれども、品川行の發車には、未だ一時間ばかり待ち合はさなければならなかつた。プラットホームの倚子に凭れて考へ込むと、自分がもう社會から只一人取り残されたものゝやうに思はれて、恐ろしい寂寥が身にせまつて來るのであつた。

學校は落第する、社會からは蛇蝎のやうに嫌はれる、懇めて呉れる女は一人も居なくなる、さらぬだに少い朋友が、今日ひとり、明日二人と失くなつて行く。自分はもう活きた世間に到底用の無い人間だ、雅夫は

何處までも自分で自分の身が嫌になつて堪らなかつた。

何と云ふ嫌な男だらう、自分の過去の生涯、若しこれを一篇の小説に綴つて見た處で、誰が自分に同情して呉れるものがあるだらう。

雅夫はもう堪らなくなつて來た。待合室に行つてせめて人の臭でも嗅いで見やうと、橋を渡つて三等待合室に入つた。其處には八王子行きの旅客が二三十人ガヤ／＼と群つて、下等な煙草の煙が濃々と部屋をこめて居た。何の顔もく生活の悲惨に疲れ切つた顔である、急に人が戀しくなつた雅夫はまた急に人が嫌になつた。

雅夫は三等待合室を出て、こんどは一二等待合室に行つた。其行には誰も居なかつた。電氣が限なく稍廣い部屋を照した居た。

黄昏である。雅夫は何とはなしに歩いて大理石のストロップの前に立つた。見るとストロップの上の鏡に自分の姿が濃縮と映つて居る。



「お、厭な奴!!! 何といふ厭な男だらう。」と雅夫は自分で、自分の姿がホト／＼厭になつた。爾うして世界に此鏡といふものが無いやうに、若し自分を知るといふ事が無かつたなら、人生は何んなに幸福だらうかと思つた。

雅夫は黙つてフイと鏡の前を去つた。

—— 黄昏終 ——

「たそがれ」は私が兵營に居る間に、夜帳を讀つたものである。心身過勞の果では、眼を患つて、非常に困難を感じた。けれども無理に筆を呵して、相模の國へ演習に行くまでに書き上げて仕舞つた。後で原稿紙を見ると當時苦悶の跡が歴々として現つて居る。それだけに讀んで居ない處も多いけれど、私には兎に角追憶の深い作である。

「聯天日記」は私が知合の成る聯長から讀いた話にヒントを得たものである。それは、二學聯と云ふたやうな大きい停車場には、なか／＼男振りの好い聯夫が居て、朝夕定期券などで通ふ立派なお嬢様と知合つて歸らぬ津から免職になる者が少くないと云ふ事であつた。其時私が取る深い感興にうたれて創作の動機を得たのが此の一畫である。



# 驛夫日記

(一)

私は十八歳、他人は一生の春といふ此若い盛りを、之はまた何として情ない姿だらう、頂垂れて凝と考へながら、多摩川砂利の敷いてある線路を私はプラットホームの方へ歩いたが、今更のやうに自分の着て居る小倉の洋服の脂垢に見る影もなく穢れたのが眼につく、私は今遠方シグナルの信號燈を懸けに行つてその戻りである。

目黒の停車場は、行人坂に近い夕日が岡を横に断ち切つて、大崎村に出るまで狭い長い堀割になつて居る。見上げるやうな兩側の崖からは、芒と野萩が列車の窓を撫でるばかりに生ひ茂つて、薊や、姫紫苑や、笠



草や、草藤の花が目さむるばかりに咲き練れて居る。  
立秋とは名ばかり燦くやうに烈しい八月末の日は今崖の上の黒い白樫の森に落ちて、葎の葉ごしにもれて来る光が青白く、うす穢い私の制服の上に、小さい紋波を描くのである。

涼しい、生き返るやうな風が一時しきり長峰の方から吹き嵐して、汗ばんだ顔を撫でるかと思ふと、何處からともなく、鯛の聲が金鈴の雨を聴くやうに聞えて来る。

私は何故恁んなに彼女の事を思ふのだらう、私は彼女に惚れて居るのであらうか、いや／＼もう決して微塵もそんな事のありやう譯はない、私を見る影もない此姿、私は恁んなに自分で自分の身を羞ぢて居るではないか。

(二)

品川行の第二十七列車が出るまでにはまだ半時間餘もある。日は沈んだけれども容易に暮れやうとはしない、洋燈は今しがた点けてしまつたし、暫らく用事もないので開け放した、窓に倚りかゝつてそれとはなしに深いもの思ひに沈んだ。

風はピツタリ竭んで仕舞つて、陰鬱な歴しつけられるやうな夏雲に、夕照の色の胸苦しい夕ぐれであつた。

出札掛の河合といふのが、驛夫の岡田を相手に、樺色の夏菊の咲き練れた、崖に近い柵の傍に椅子を持ち出して、上衣を脱いで風を入れながら、何やら頻りに笑ひ興じて居る。年頃廿四五の、色の白い眼の細い頭髪を油で綺麗に分けた、中々の洒落者である。



山の手線はまだ單線で客車の運轉はキンの僅かなので、私達の労働は外から見ると忙しくはないそれに會社は私營と來て居るので、官線の驛夫等が嘗るやうな規則攻めの苦しさは、私達にないので、何方かといへばマア呑氣といふ程であつた。

私はどうした機會か大槻芳雄といふ學生の事を思ひ浮べて、空想はとめどもなく私の胸に溢れて居た。大槻といふのは此停車場から毎朝、新宿まで定期券を利用して何處やらの美術學校に通うて居る廿歳ばかりの青年である。丈はスラリとして瘦型の色の白い、張の好い細目の男らしい、鼻の高い、私の眼からも惚々とするやうな、嫉ましい程の美男子であつた。

私は毎朝此青年の立派な姿を見る毎に、何ともいはれぬ羨しさと、また身の羞しさとを覺えて、野鼠のやうに物蔭にかくれるのが常であつた。

た。永い間通つて居るものと見えて、驛長とは特別懇意でよく驛長室へ來ては巻煙草を燻べながら、高らかに外國語の事などを語り合ふて居るのを聞いた。

私の眼には立派な紳士の禮服姿よりも、軍人のいかめしい制服姿よりも、此青年の背廣の服を着た書生姿が、云ひ知らず心を惹いて堪えられない苦痛であつた。私は心から思ふた、功名もいらぬ、富貴も用はない、けれども只一度此脂垢の潤みた驛夫の服を脱いで學校へ通ふて見度  
S.....

噫私の盛りは恁んな事をして暮して仕舞うのか。

私は今ふと昔の小學校時代の事を想ひ出した。薄命な母と一處に叔父の宅に世話になつて居た頃、私は小學校でいつでも首席を占めて、義務教育を終るまで、其地位を人に譲らなかつたこと、將來は必然偉い者に



なるだらうといふて人知れず可愛がつて呉れた校長先生の事、世話になつて居る叔父の息子の成績が悪いので、苦勞性の母が、叔父の妻君に非常に遠慮をした事など、それからそれへと思ひ巡らして、追憶はいつしか昔の悲しい、いたましい母子の生活の上に遷つたのである。

忙然して居た私は室の入口の處に立つ人影に驚かされた、見上げるとそれは白地の浴衣に、黒い唐縮緬の兵兒帯を締めた、大槻であつた。

「君！汽車は今日も遅れるだらうね、」

「え、十五分位……は」と私は答へた。山の手線はまだ世間一般によく知られて居ないので、客車は殆ど附屬のやうな觀があつた、列車の遅刻は殆ど日常の事となつて居た。

日はもういつしか暮れて、朝の聲も何時の間にか消えて仕舞つた。大槻は一寸舌を鳴らしたが、改札の机から椅子を引き寄せて、應接に

腰を下した、出札の河合は上衣の袖を通しながら入つて來たが、横眼で悪々しさうに大槻を睨まへながら、奥へ行つて仕舞つた。

「今から何方へ入らつしやるのですか」私は何と思つてか大槻に問ふた。

「日比谷まで……今夜、音楽があるんだ」と云ひ放つたが、白い華奢な足を動かして蚊を追ふて居る。

(三)

「君！僕一つ君に面白い事を見やうか」



「え……………」

「軌道なしに走る汽車があるだらうか。」

「そんな汽車が出来たのですか。」

「日本に有るのだ。」

「何處に。」

「東京から青森まで行く間に丁度、一里十六町ばかり、軌道なしで走る處があるね」と云ひ切つたが香の好い巻煙草の煙をフツと吹いた。

私は何だか自分が酷く馬鹿にされたやうな氣がして憤然とした。陰鬱な、沈みがちな私はまた時として非常に物に激し易い、卒直な天性を具へて居る。

「冗談でしやう、僕はまた眞面目にお話して居ましたよ」私は成人らしい少年だ、母と叔父の家に寄寓してから、それはもう随分氣量、苦

勞の數をつくした。母は人にかくれてまだうら若い私の耳にいたましい浮世話を聞かせたので、私は小さき胸にはりさけるやうな悲哀を押しかくして、私に薄命な母を憐れた、私は今茲十八歳だけれども、私の顔を見た者は誰でも廿五六歳だらうといふ。

「君怒つたのか、よし、君がそんな事で怒る位ならば僕も君に怒るぞ若し青森まで軌道なしで走る處が一里十六町あつたらどうするか」聲は稍高かつた。

「そんな事がありますか！」私は眼を視眼で呼氣をはづませた。

「いゝか、君！軌道と軌道の接續點に凡そ二分ばかりの間隙があるだらう、此間下壇の待合室で、あの工夫の頭に聞いたら一哩にあれが凡そ五十ばかりあるとね、それを青森までの哩數に當てて見給へ丁度一里十六町になるよ、つまり一里十六町は汽車が軌道無しで走る譯ぢやあない



か。

私はあまりの事に口も聞けなかつた、大槻が笑ひながら何か言はうとした刹那、開塞の信號がけた、ましく鳴り出した。

(四)

品川行のシグナルを處理して私は小走りに階壇を下りた。黄昏の暗さに大槻の浴衣を着た後姿は小憎らしい程あざやかに、細身の杖でブラットホームの木壇を叩いて居る。

私は何だか大槻に馬鹿にされた様な氣がして、云ひやうのない不快の

威が胸を衝いて堪え難いので鏡の水を柄杓から一口グイと飲み干した。

鏡の水といふものは此崖から絞れて落つる玉のやうな清水を集めて、小さい素焼の瓶に受けたので棺物の柄杓が浮べてある。四邊は芒が生ひて、月見草が自然に咲いて居る。之は今の驛長の足立熊太といふ人の趣向で、恁んな事の端にも人の心懸けはよく表はれるもの、此驛長は餘程上品な風流心に富んだ、恁ういふ職業に埋れて行くには可憐しいやうな男である。長く務めて居るので、長峯界限では評判の人望家といふ事、道樂は謠曲で、暇さへあれば社宅の黒板塀から謠ひの聲が漏れて居る。やがて汽車が着いた。私は驛名喚呼をしなければならぬ、「目黒々々」と二聲ばかり戸を開けながら呼んで見たが、どうも澄しいやうな氣がして咽喉がつかつた。列車は前後が三等室で、中央が一二等室、見ると後の三等室から、髪をマガレットに束ねた夕闇に雪を欺くやうな乙女の半